

婦人
と子とも

第四卷第七號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は、ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は常會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年七月二日印刷
同 年七月五日發行

不許複製

發行所 兼 東京市神田區西小川町一丁目一番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發賣所 金 昌 堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

婦人と子ども 第四卷第七號目次

子ども

新鬼が島征伐……………一
 いそつぷの話……………二五
 馬の話……………三七
 一口話……………三〇
 考へものゝ答……………三一
 犬のお家……………三二
 婦人と子ども……………三三
 幼稚園保育の効果につきて……………牧 羊…三三
 婦人と迷信……………市川源三…三七
 よら家庭……………う ばら…四一

家庭に於ける所感……………飯塚忠次郎…四四

割烹十二ヶ月附録季節料理……………石井泰次郎…四四

貞一の日記……………その 母…五〇

決死隊……………佐々木信綱…五五

青葉集……………其 子…五九

フレーベル會俳句端書集……………鹽野奇零…六九

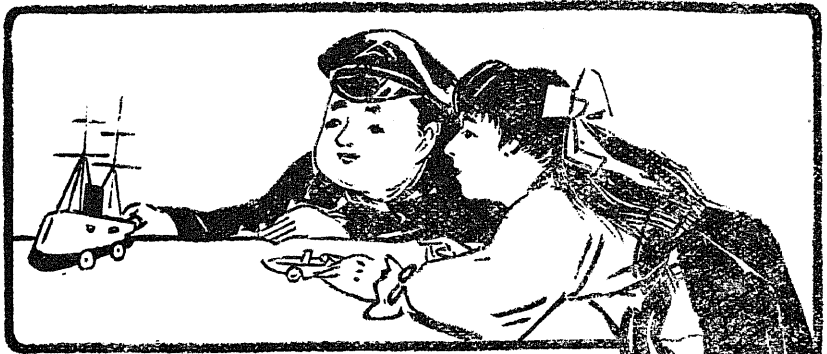
一の組保育誌……………ふ み 子…六三

女子高等師範學校附屬幼稚園分室……………六六

市川君に……………東 基吉…七〇

雜 報……………七〇

●女子高等師範學校 ●大日本女子教育會 ●大塚音楽會 ●新刊紹介 ●會報



婦人と子ども

第四卷第七號

新鬼ヶ島征伐

やまとの翁

葦原村といふのは、日本のどの
邊だか知りませぬが、先づその
村に、年老った老翁と老嫗とが
住んで居ます。この老夫婦は、
餘程以前から代々ひきつゞいて

この村に住んで居るといふ話で、先祖といふのは、何でも、昔話
 にある桃太郎時代に居った人で、彼の猿蟹合戦の時などは、實地
 戦場に行つて觀戦した事もあると言つて居ります。

さて、此老翁と老嫗とは正直で、人が善いものですから、村中の
 人から大事にして可愛がられて居ました。そして、別にあり餘る
 といふ身代ではありませぬが、夫かといつて、貧乏といふ程でも
 なく、お老翁は、毎日山へ柴刈りに行くし、お老嫗さんは、川へ
 洗濯に行つたりして、楽しく二人で暮して居つたのですが、たつ
 た一つの不足といふのは、二人の間に子供のないといふ事であり
 ました。お老翁さんもお老嫗さんも、毎日朝、辨當持つて出かけ
 て行つては、夕方歸つて來て、二人で面白く話などして、夕御飯

をお甘く頂くのですが、時々、「あゝ、子供を一人欲しいもんだな」と、お老翁さんが、言ひ出すと、「そーですね」とお老翁さんが言つて、二人で、そつと歎息することがありました。

所が、ある日、大變な事が起りました。いつもの通りお老翁さんは山へ行くし、お老嫗さんは、河へ行つて洗濯して居りますと、向ふの方からして、夫はく、大きな桃が流れてきました。そこでお老嫗さんは、大層喜んで、

「オヤ、こんな大きな桃が流れてきた、確か、昔しく私の先祖の嫗さんが、此川へ洗濯に來た時も、丁度こんな桃が流れて來て、その桃の中から、あの桃太郎さんが生れて來たのだといふ話を聞いて居るが、ひよつとかすると、夫と同じ様に、この中から

又赤兒が生れて來るかも知れない、どれ、早く持つて行つて、お老翁さんと、割つて見ましよう」

といつて、洗濯などは、大抵にして仕舞つて、其桃を大事に背負つて、急いで家へ歸りました。

間もなく、お老翁さんも山から歸つて來ましたから、お老嫗さんは、早速其桃を見せて、自分の考を話して見た所が、お老翁さんも、「なる程！ ひょっとかすると、そんな事があるかも知れないな、待てよ、夫では切る前に、お湯も沸かして置かねばなるまい、盥も用意して置くがよいぞ」

「はい、夫は、前から、もうちゃんを用意して、何時、赤兒が出來ても、よい様にして居ます」

など言つて、もう丸で、人間が子を生む時の用意などして待ち構へて居ります。

「あ、一つ切つて見ようかな」

「さあ、切つて見ましよう、甘く切らないと、中の赤兒を怪我させては行けませんよ」

「大丈夫、さあ、切るよ」

「と、大きな桃を、二つに切り割つて見た所が、いきなり、」

「其中から」

「大日本帝國萬歳!!」

と叫びながら、出て来た者がある、其聲が餘り大きかったもんだから、二人の年寄は、吃驚したとは、桃の中から、雷でも落ち



て來たのかと思つた位でした、やがて、氣を静めて見て、二度

六

吃驚、話で聞いた桃太郎の面影そ
つくりの可愛い、赤兒が、兩手に
國旗と軍艦旗とを、高くさし上げ
て、桃の中に、仁王立ちにつっ立
つて居ります。

「おやまあ、こんな可愛い、赤さ
んが出ましたよ」

「お、昔の桃太郎さん、そっく

りだ、夫に矢張り、同じ様に桃の中
から出て來たのだから、ひよ
つとかすると、桃太郎さんの親類
かも知れないよ

第一ハイ、僕は、其昔話の桃太郎さんから、百代目の孫に當つて居
 る明治桃太郎といふ者です。先祖の桃太郎さんは、やつぱり、あ
 なた方の御先祖の拾つた桃から生れましたが、其子孫の私が又、
 あなた方に拾はれたといふのは、よほど深い因縁と見えます、ど
 うか、先祖の桃太郎と同様、宜しく御願ひ致します」
 など、赤兒と思つたのが、こんなに立派に挨拶など致しました
 から、二人は、丸で煙に巻かれて仕舞ひました。併し、何しろ、
 昔話の桃太郎百代の孫といふ明治桃太郎が、出たのですから、老
 人夫婦の喜といつたらない位で、「まあ、お湯にでも這入って、
 ゆっくり、昔話でもしようじやないか」といふので、天から、明
 治桃太郎は、お湯に這入りましたが、さて、其晩の夕御飯の賑か

で面白かった事といったら、

先づ、お老嫗さんが、先祖のお嫗さんが川へ行つて拾つた桃の事やら、其中から桃太郎が出た事など昔話の儘に話すと、お老翁さんは、又桃太郎の豪かつた事から、とうく鬼か島を退治して、いろくな寶物など土産にして歸つた事などを面白く話してどうか、明治桃太郎も、先祖に劣らぬ豪傑になつてくれと、嬉し涙に咽んで語りました。

明治桃太郎は、始終、にこくして、二人の話を熱心に聞いて居ました。が、さて申しますには、

「あの、お老翁さんにお老嫗さん、先祖の桃太郎はお話の通り、鬼が島を征伐する爲めに出て來ましたが、實は僕も、其爲めに出

て來ました」

「ウシ、なる程、夫では今でも矢張り、そんな鬼が居るかの」

「ハイ、おりますとも、あの時征伐した鬼どもは一旦降参しました
たが、此頃、彼等の子孫の鬼どもが、新鬼が島に居ってまたく
惡戯を始めて、人民を困らせたり、他人の國を略取って占領しよ
うとして居ます、ですから、僕は、も一度、彼等を征伐しようと思
つて、出かけて來たのです」。

「なる程、夫は豪い、然し、そう聞くと、新鬼が島といふのは、
餘程大きなもので、又、昔話の時と違つて、世の中も進歩してる
から、武器なども、大層文明の利器を應用して居るだらうで、中
々ちよいとでは、征伐が出來まいの」

鎮ハイ、夫は鬼の方も、中々發達して居まして、先祖の時十は、海軍などはなかつたですが、今では、陸軍と共に海軍も、よほど整備して、軍艦にも、一万五千噸といふ戰鬥艦や、夫に巡洋艦、驅逐艦、水雷艇など随分備はつて居ます、尙、近頃、又潜航水雷艇といつて、水中を潜つて來て敵艦を攻撃するのも出來たといふ事です、陸軍も、随分鬼數が揃つていて、其陣屋は、鐵條網だの、地雷火だの塹壕だの、いろいろ防備をしてる相でず、併しそんなものは、何でもなからうと思ひます、今にすっかり降參させて御覽に入れます。

老人二人は、この話で、又吃驚しました、たつた今出て來た許りの赤兒と思つたにこんな豪い話をするもんですから、全く神様が



人間の形になって降來して
 來たのだと思ひまして、之
 からは、一層大事にして育
 てようと思ひました。
 さて、其中に、だんく月
 日もたち、明治桃太郎一日
 く大きな立派な身體に
 なりました。そして、毎日
 隙さへあれば家の斑犬を連
 れて行って山へ遊びに行く、
 すると其山に住んでる大猿

や雉などが出て来て、そこで四人一所になつて遊んだり、又は戦争の稽古などして日を暮らして居りました。

そうして居る中に、彼の新鬼が島の亂暴は、ますます甚しくなつ

て、遂にはこの葦原村をも略取らうといふ企てをする様になりま

したから、明治桃太郎は、もう承知しません斷然決心を致しまし

て、或日のこと、老人夫婦の前に出まして、

「さて、お老翁さんにお老嫗さん、永々お世話になりましたが、

いよく近日出發致しまして、かねてのお話の通り新鬼が島征伐

に出かけようと存じます」

すると、お老翁さんは「あゝそうか、いよく出かけるかの、し

かし、其方獨りか、又いろいろの作戦計劃は出來て居るかの

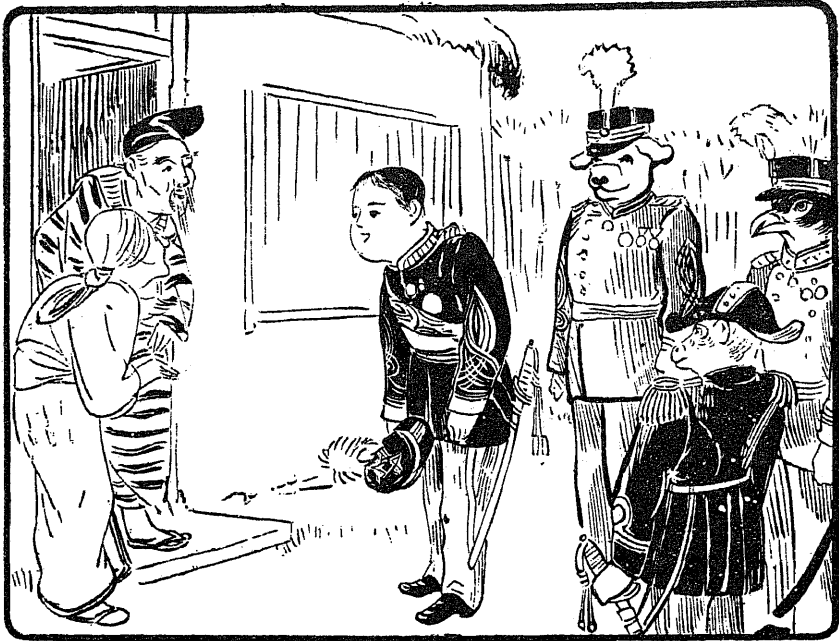
桃ハイ、家來には、先祖の桃太郎が従へました通り、犬と猿と雉との三匹が、めい／＼眷屬を引き連れて來る事に相談が決りました、尤も、其中、猿は海軍の方の勤務に當りまして、他の二匹は、私が指圖して陸軍を組織します、ハイ、大砲の様なものも、すっかり整うて居ります、夫から、これは特別に、お老嫗さんにお願致したいのですが……

「あゝ／＼、何のご用かの

桃ハイ、その糧食の一件なので、これは、矢張り、日本一の黍團子をこしらへて頂きたいので、

「あゝ、宜しいとも、すぐにこしらへますよ

さあ、夫から大騒ぎになった、お老嫗さんは、急に近所の人を呼



ひ集めて来て、皆で其晩から、
 一生懸命になって、黍團子をこ
 しらへる。お老翁さんは、饞別
 にとて先祖傳來の銘刀を磨き立
 て、夫をサーベルにこしらへ直
 して居る
 夫から、四五日たつと、もう、
 すっかり用意が出来ました。い
 よく出發といふ日になります
 と、明治桃太郎は、陸軍大將の
 軍服を着けて夫に出ますと、犬

と雉とは、陸軍將校の服装で、猿が海軍將校の服を着けて、ちやーんと、其處に并んで居ます。

桃夫では、お老翁さんに、お老嫗さん、どうか、御機嫌よろしう、ちき近い中に、凱旋しますから、

二人どうか、目出度う、凱旋の日を待ちますよ、

そうして居る中に、此評判を聞きつけて、村の人等はいろくな旗など立て、見送りに來まして、皆一齊に、

「明治桃太郎君萬歳、陸海軍萬歳！」

さて、明治桃太郎將軍は、三匹の將校を引きつれて、そこを出て村の港まで來ますと、そこにはちやんと、○○隻の軍艦が揃うて待つて居る、夫に○隻の大運送船には、犬と雉の眷屬約○個師團

が乗り込んで、一令の下に、今にも出發しようとする用意して居りませう。そこで、桃太郎將軍は、三匹の將校に命じて、今車で積んで来た、日本一の黍團子を、戦争中の糧食にといふので、一つく各兵士に配らせました。

さて、いよく明治廿七年六月〇日の午砲を合圖に、海陸の大軍は此港を出航しました。折しも嚙喰たる海軍や樂隊が聞えますと運送船の陸兵等は、一齊に唱ひ出しました。

桃から生れた桃太郎　　氣はやさしくて力持
鬼が島をば伐たんとて　　勇んで家を出かけたり

所で一方新鬼が島に於ても、前申した様に、いろく隣國を取た

り、其人民を苦しめたりして得意がって居ました所が、いよく
今度日本の葦原村から昔話の桃太郎百代の孫、明治桃太郎將軍の
下に、犬猿雉の、眷屬ども、海陸兩軍に分れて攻めよせるといふ
電報を見て、大層吃驚しました、先祖の桃太郎の爲めには、吾々
の先祖も随分ひどくやられたが、其子孫といふのなら、きつと強
いに違ない、新らしい學問もしてゐるに違ない、といつて、戦争し
ないで降参する譯にも行かないし、などいつて、いろく軍議を
こらしましたが、何しろ幾らつよいといつても、軍勢などは少い
のだから、十分の防備さへして置けば攻めて來ても大丈夫といふ
ので、夫からといふものは、夜を日についで、防備はとりかゝり
ました。

即ち、軍港の入口には、數知れぬ機械水雷を敷設して、敵艦の入り込めない様にし、各砲臺には、三十二インチ砲など幾つも備へ付けたり、脊面防禦として、一面に地雷火を埋め、其上、幾重にも鐵條網をはりつけて、敵の突貫に備へ、各所に塹壕をほりわつて、例令何十万人の敵の寄するとも、ひくともしない様に、嚴重の固めが出来ましたので、例令ば、今日の旅順口其儘 あつぱれ難攻不落の、要害となりました。
 所が、或晩のこと、猿の艦隊は、明治桃太郎將軍の命令に由り、決死の猿士をよりすぐつて、決死隊を組織し、○隻の水雷艇に乗り込んで、敵の敷設水雷の間を潜り抜けて、港口深くへ這入り込み、油斷を見澄まし、魚形水雷を發射して、見事、敵の大戦闘艦を

轟沈させて、スリ、大變と狼狽して騒ぐ間に水雷艇隊は、些少の損害もなしに、無事に根據地まで歸航しました。

さあ、そうなると、新鬼が島では大恐慌を來しまして、夫からといふものは、殘の艦隊は、慄へ上って、仕舞って、港内深くとち籠ったなり、更に出で來るといふことがなくなりました。夫で、仕方なしに、猿の艦隊は、皆で揃って行って、其出口へ又機械水雷を敷設して、とう／＼敵の軍艦を全く封鎖して仕舞ひました。そこで、今度は、いよ／＼陸軍の順番になりました、之より前に陸軍の運送船は、既に海軍の掩護によりて、無事に某港へ上陸して、専ら攻撃についての作戰計畫を定めて居ましたが、もう、敵の軍艦も全く封鎖されたのですから、明治桃太郎將軍は、犬と雉

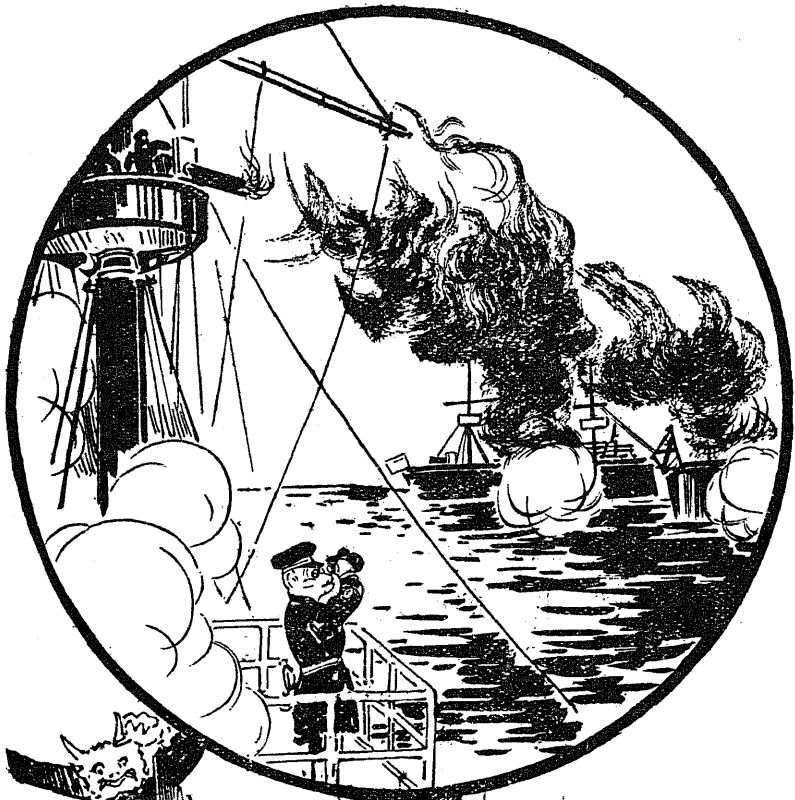
との。○個師團に向つて、一時に總攻撃の命令を傳へました。すると、大軍恰も潮の湧くが如くに敵陣目かけて進みましたが、中にも雉の大部は、砲兵の任務に當つて、後方の高い所に砲兵陣地を布き、こゝからして、敵の陣營に向つて、頻に猛烈の射撃をやつて、同時に、我が歩兵の犬軍を掩護して居ますと、歩兵の犬軍はバラバラバラバラと連發銃をつゞけ撃ちにやつて居る。

明治桃太郎は、始終、軍の進行を観察して居ましたが、敵も、必死となつて、砲臺からは、しきりに機關砲をつゞけ撃ちにする、其上、敵の歩兵は彼の塹壕の中に、身體を隠して、其中から、しきりに我軍を射撃して、中々頑強な抵抗を試みて居るから、此儘では、到底、いつ陥るかも知れないと思つて居ると、恰もよし、港

口封鎖の任に當つて居た、猿の艦隊の一部隊が、こつちへ回つて
来て、いきなり、敵の左翼面からして、有力な射撃を送りました
ので、さしも頑強な敵も、是には大に閉口したと見えて諸砲臺は
忽ち沈黙しました。此有様を見て、將軍は、「すわ、此機を外さず、
敵陣に突貫せよ」と命令を下しますと、犬の總軍は、銃劍を提げ
て、ワーンと突貫する、雉の一部隊の工兵は、斧を振って鐵條網
をたゞき切つてすぐ城門に迫つて、綿火薬を裝置して、いきなり、
電氣をかけたから、城門は非常な大きな音をして爆發したから、
明治桃太郎は、馬に鞭つて、眞先に進入すると、續いて犬軍ども、
我もくと突貫したので、さしも頑強な敵も、とうくと白旗を上
げて、茲に新鬼が島は全く降参しました。

そこで、明治桃太郎は、部下の將卒に休戦を命じ、自ら鬼の本陣に乗り込みますと、敵の大將の黒鬼は、部下の白鬼だの赤鬼だのを引き連れて、桃太郎の面前に出で、今迄の罪を謝し、之まで占領した地面は奇麗に隣國へ返して仕舞ひ、以後は決して、再び人の地面は取らないといふことを約束して、尙軍港内に封じ込められた





軍艦たの、砲臺に残つて居る大砲たのは、一切明治桃太郎に献上した其上に、償金として百億圓をも納めるといふ條約を結びました。

そこで、明治桃太郎は、目出度く、葦原村に凱旋しますと、村では、大變な勢で、提灯行列やら、凱旋門をたてるやらで、大祝勝大歓迎會を舉行しましたが、天子様からは、特に金鵄勳章功一級を下さいました。之から桃太郎は、家に歸つて、お老翁さん、お老嫗さんに孝行を盡して、一生、幸に暮しました。又隣國も、明治桃太郎のお蔭で、何れも、彼の殘虐な鬼の奪掠を免れて、平和を樂む事が出来る様になつて、大變に、桃太郎の恩義を感謝しましたとさ

めでたしく

いそぶの話

(六十二) 鼠の會議

いつも、猫奴が、密と来ては、鼠を捕獲するから

何とかして猫の近くに來ること

を知る工風がなからうかといふ

ので、鼠どもが澤山寄って、會

議を開きました。いろ／＼の案

が出ました中で、一番、これ

そといふ名案は、猫の頸へ鈴を

結び付けて置けば宜からうとい

ふ建議でありました。なる程、

それならば猫の歩くにつれて、

鈴がなるから、其音でいつ猫の來た事が知れ

るので、之は、頗る名案と、一同手を拍って感心し

ました。所が、議長と見える一匹の鼠が「然し猫



に鈴を結び付けに行く者は、誰だ」と問うて見ると、行かうといふ者は一匹もなかった。

(六十三) 猪と狐

猪が、或時、木の下に立って、一

生懸命に、其牙を木の幹へこす

りつけて居ると、狐がやって來

て、獵夫も、犬も見えて居ない

に、なぜそんなに牙を磨いで居

るかと問ひました。猪は答へま

した。「今何も見えない中に磨い

て置かんけりや、いざ鎌倉とい

ふ時の間に合はぬじやないか」

(軍備は平和の確保なりといふ諺がある)

(六十四) 年老つた獵犬

或所に一匹の獵犬が居りました。若い時は、獵に

行つて、中々他の獸を見逃す様な事はなかつたのでしたが、大分年老つてから、或時のこと、一匹の猪に出會ひました。夫と見るや、忽ち、飛びかゝつて行つて、耳へ食ひ付きました。悲しいことには、もう、すっかり齒が利かなくなつて居るから、すゝより離されて逃がしてやりました。主人は此有様を見て、非常に失望して、いきなり、犬をなぐらうとしますと、犬は怨めし相に主人の顔を眺めて、「御主人様、猪を逃がしたのは、私の罪でありません、私の精神は、今迄通り確なものです、併し、取る年には叶ひません、どうか、今の私をお叱り下さるよりは、以前の私をお褒め下さる事を願ひます。」と申しました。

(六十五) 二人の友と手斧

或時のこと、二人連れ立って道を歩いて居りました。

た。一人が、道に置いてある手斧を拾つて、「オー君、僕は、手斧を見付けたよ」といふと、相手は隙さず、「イーヤ君、『僕』がでない、『吾々』が見付けたと言ひ給へ」やがて、暫くすると、手斧の持主が、すた〜と走つて追つかけて來たので、前に拾つた方が、眞青になつて、「さあ、弱つた、吾々は取つかまるよ」、すると、相手は、「なーに、君、さつと君の言つた事を覺えて居給へ、其時、間違のない事なら、今でも間違ないだらう、『吾々』なんかいはないで、矢張『僕』といひ給へな」

(六十六) 樅樹と葦

大きな樅の木が、大風に出遭つて、根から、引っこ抜かれて、河のズット向ふまで吹き飛ばされて、そこに生えて居る葦の中に落ちて、いふには「こりや奇態だ、こんなに輕く弱々しい葦などかこ

の大風おほいかぜに、よく吹き潰つぶされぬものだなあ、しますと、其輩そのあしどもが「そりやあな、貴下あなたは、此大風このおほいかぜに抵抗ていこうして争あそふからいけません、私等わたしは、ごらんの通り、ちよつとの風かぜにも、直ちき頭あたまを下さげます、だからこんなに助たすけて居いますのさ」と答こたへました。

馬うまの咄はなし

(一) 馬うまの忠義ちゆうぎ

馬うまが、人間にんげんに對たいして親おやしみの情じやうを顯あらわはすことは、犬いぬや象ぞうにも劣せうりますまい。親切しんせつな主人しゆじんの聲こゑを聞きわけて、呼よべば直すぐ飛とんで來きる事ことなどは、ぢき覺おぼえて仕舞しまひまして、主人しゆじんが居いれば喜よろこんで居いるし、主人しゆじんが留とどまにでもなると、何なにんだか不愉快ふげきな、引ひつたない風ふうをして居いります、仕事しごとでも、主人しゆじんと一所いっしょなら喜よろこんで仕します。時々ときどき、知しらぬ人ひとに向むかつては、隨ま

分ぶん亂らん暴ぼうな事ことはしますが、自分じぶんと親したしい人ひとには、餘よ程ほど、ひどい目めにでも遭あはされなければ、決かして不ふ忠實ちゆうじつな事ことは致いたしません。

それで、忠義ちゆうぎな馬うまのお話はなしも随分ずいぶんあります、今度こんどの日ひ露戰争ろせんそうに於おいても、まだ傳つたはる隙ひまはありませんが何なにれ、可愛相かあひそつな馬うまのお話はなしなども、だんく聞きえる事ことと存ぞんじます。

これは、西班牙いすぱにあでの戰争せんそうに付ついての話はなしですが、佛ふつ蘭らん西軍せいぐんの騎兵きへいの喇叭手らっぱしゆが、立派りっぱな馬うまを隊たいから與あたへられて非常ひじょうに可愛かあひがつて居いりますと、馬うまも、此新このしん主人しゆじんに對たいして大層たいそう愛情あいじやうを顯あらわはす様ようになりました。其その一例いれいを云いつて見みますと、何處どこに居いつても、一寸いちゆんでも喇叭手らっぱしゆの聲こゑが聞きこえるか、其姿そのすがたが見みえるか、尙驚なほおどろくべき事ことは、喇叭らっぱの響ひびきでも聞きこえ様ようものなら、もう大騒おほさわぎだ、中々なかなか、じつとして靜しずかにはして居いな

い位

それに、不思議なことは、此喇叭手が騎れば、頗る喜んで忠義に立ち働きますが、他の騎手に對しては丸で駄目なのです。夫は一度、都合があつて、此馬が他の隊へ回はされて、或士官の乗馬にせられた事がありましたが、さっぱりいゝ事を聞かないで、元、元の喇叭手の所へ逃げ返つて來ましたので、仕方なく、又元を通り、喇叭手の乗る馬と定められました。

夫からといふものは、殆んど三年の間、此喇叭手を載せて、戦争中、數知れぬ危い目を助けてやつて参りましたが、或時のこと、此喇叭手の隊が、ひどい敗軍をして、其退却の混雑の際彼は重傷を負うて、戦死したが、其死屍は、餘程の日數経つてから、發見された、そして、其時まで、此忠義

な馬は、其場にちやんと立つて居ました、此永い間彼は決して、主人の側を離れないで番をして、水も飲まない、物も食べないで、鳥などを逐つて居たのゝ見えます、夫で、見付けられた時分には、もうひどく弱つて居ました、手傷からでもありましたが、多分は悲しみの餘り食物を食べなかつたからであります。

(二) 馬の復讐

馬は、元來、やさしい性質のものですが、夫でもひどい目に遭つた事などは、よく覚えて居て、復讐をした話が澤山あります、嘗て亞米利加のポストン近くに住んで居た人が、いつも、野に飼つて置く馬を捕らへようとする時は、容器に、幾らかの麥を容れて餌に持つて行きました、そして、馬を呼んで、其やつて來て、麥を食つて居る所を、いきなり手

綱をかけて擔つて仕舞ひました、夫ばかりなら、まだしもですが、時には、容器に何も容れて行かないで欺すこともあります、そこで、馬も遂には主人のすることを疑ふ様になつて來ました、夫で或時のこと、主人の呼ぶにつれて、馬がやつて來て、ちよつと容器を眺めて、其空虚なのを見るや、いきなり、後足で立ち上つて、前足を舉げて、ボンと主人を蹴つて、其席で即死して仕舞つたといふ事です。

(三) 交際好きは動物

それから、馬は中々交際好きでして、馬に依ると、自分等丈で、厩に居たり、野に居たりするのは大嫌ひで犬でも、牝牛でも、山羊でもよい、羊でもよい、一所に居てさへくれれば喜んで居ます。

此馬の交際に付いても面白い話があります、

英吉利のブリストルの紳士が、一匹の犬を飼つて居ましたが、此犬はいつも、厩の中に入つて馬と一所に寝る事になつて居ました、そして、いつも、此紳士が散歩に出かける時には、厩の前まで來て、犬を呼んで一所に連れて行くのですが、其時には、又此馬が、心配さうな風をして肩の上から犬を眺めて、丸で「どうか、私も一所に連れて行つて頂戴」といふ様な調子で、高く、嘶くのでありました。そして、犬が、厩に歸つて來ると、馬は、いきなり高い聲で嘶きます、犬は、又馬にかき上つて行つて馬の鼻を咥めてやります、すると、馬は其御禮に齒で以て、犬の脊中をこすつてやります、或時のこと、馬は馬丁と一所に外に居りますし、犬も外で運動して居りました所が、外から大犬がやつて來て、忽ち、此飼犬を噛み伏せました、馬は

此有様を見ると、いきなり、兩耳を立て、止める馬丁の手をふり離して、彼の犬に突進して其脊中に噛み付いて、友犬を離なさせましたが、可愛相に、大犬は其爲めに、脊中の肉を一片噛み取られました

(四) 軍隊附きの馬

久しく、軍隊の用になれた馬だといふと、非常に兵隊さんの、練兵が好きになります、或る博物學者の言ふ所によると、年老つた軍隊の馬が、殆んど、骨と皮とに瘠せて居つてさへ、太鼓の音や喇叭の響を聞くと、忽ち、若返つて来て、若し、兵隊の行進でも見ようものなら、自分も夫に従つて行かうとして中々止められないといふことです、

嘗て、英吉利のギレスビーといふ將軍が、印度で戦死しました時、將軍の愛馬は、部下の將士等が

大切に於て、英國まで連れて參つて居りましたが、やがて、夫を或る金満家に賣りました、然し、名譽の馬ですから、大事にして死ぬまで安樂に養つて置かうといふ、其紳士の考でありました。所が其軍隊が進軍して行つて仕舞つて、喇叭の音が遠くに消え去るといふと、さあ、此軍馬が、ふさぎ込んで仕舞つて、食物も何も食はない、そして居る中たまゝ厩から出されるのを待つて居つて、いきなり駆け出して、今迄、なれて居た練兵場まで行つて、そこで、一聲高く嘶いた後ち、斃れて死にましたといふことです。

一口話

▲流車の中で、革靴を盗まれていつて、大騒ぎをして居ると、連れの人は一向平氣で「併し、鍵さへ此

方にあれば大丈夫でせう」

▲露西亞兵の捕虜が、日本兵士の、梅干のはいつた握り飯を食べてるのを見て、「道理で、日本兵は強いと思つた、皆小さい國旗を飲み込んで居るから」

▲甲「露西亞の浦鹽艦隊は、いつも霧に助けられるな」

「さうさ、霧と露とは親類同志だもの、然し今に日が當れば、兩方とも消えて仕舞ふよ」

考へものゝ答

●盲人にでも見ゆるものは、(答) 夢

●自分の物であつて、自分の手に入る前に、先づ人に取られるものは、(答) 寫眞

●鳥が十羽木に止つて居たのを、鐵砲で三羽射落したら、後に三羽残つたといふのは、(答) 後の七羽は驚いて飛んで仕舞つて、射られたの丈が死んでそこ

に残るから、

犬のお家

冬の寒い時、一匹の犬が出来る丈け身體を小さく丸めて、慄えて居ましたが、とうとう獨りで家を作らうと思ひました。

所が、夏になりましてからは、反對に出来る丈け身體を伸ばして寝ますから、自分に、大變大きく見えました。

そこで、こんなに、大きくなつたり小さくなつたりする身體に合ふ様な家を作るのは、中々容易でないと思ひました。

婦人と子とも



幼稚園保育の功果につきて

世の中には、教育の力を過信する人がある、教育さへ受けさせれば、どんなにでも豪い者になれる、どんな、立派な者にもなれると考へるのである。併し、これは間違である、教育は、そんな萬能力のある者でない、どの位、教育を施した所が、天性馬鹿な者を賢くする譯には行かぬ、天性鈍な者を非常に伶俐な者にするとは出来ぬ、學科の方でも、どうしても性來、算術の嫌な者を、立派な數學家にしようも

いふことは、望めない、松の木を梅の木にするといふ様なことは、教育に於ては到底出来ないものである。これは、教育の方では、子供の個人性の上から来る制限といつて、教育を受ける子供には、各自もって生れた特別の傾向があつて、教育では、とても、其以上に力を及ぼす事は出来ぬ、多少は、其性質に影響を及ぼして、非常に軽躁な子供は、少しは軽躁でなくする事は出来るにしても、全く一變して、着實沈重の人物にすることは出来ないのである。夫だからして、どれ程資本をかけて、教育した所が、出来ない者は、矢張、物にならない、これは、どうも仕方がないのである。

然し、以上の理由があるからといって、この子供は出来ないから、教育を施しても駄目だ、一層のこと放任して、なり行に任せて顧みないで置かうといのは、又甚しい間違だ、なる程、前述べた様に、教育には、一定の制限があるけれども、其制限内に於て、教育の力を十分働かせることが出来る、例へば、天性、悪い傾向のある子供は、放つて置けば、だんく甚く悪くなって行くのであるか、教育を施して夫を或程度まで食ひ止めて、悪くなくて行かない様にする事が出来る、若し又善良な、性質のものは、教育によつてますますよくなる様に育てることが出来る、かういふ次第であるから、よくても、悪くても教育を受けさせないといふ譯には行かぬ。西洋のエライ學者が、「人の人たる事を得るは、たゞ教育の力に依る」といふたのは、このことをいふのであらう。

夫で、一汎普通教育は、子供の發達の順序に應じて、家庭教育、幼稚園保育、小學校教育といふ様な種

類に分れるが、前述べた子供の個人性の上から来る制限は、どの種類の教育に於ても免れることは、出来ぬ、故に、餘程、教育に注意する家庭の子供だからといつて、小學校に行つて、始終優秀とはいはれぬ、反つて、一向、家庭教育などに重きを置かない所の子にエライのが出来る事もある、これも仕方がない。幼稚園保育の成果も、同じことである、いくら、幼稚園の保育を受けたからといつて、鈍な者は矢張り鈍である、餘り出来ない者が非常な豪い者になることの出来ることは、決り切つた事である、然るに、教育力の過信者は、特別に幼稚園保育の成果につきて多きを望んで居るかの様に見える。幼稚園の保育を受けた子供は、誰れも彼れも、小學校へ這入つてから、悉く優等の成績を得るべきである、學科の成績の優等たるべきは勿論、品行も、否な、其子供の性質まで悉皆優良であるべきであると言ふのである、これは、甚だ過當の要求である、實際僅か、三年間幼稚園保育を受けたからといつて、こんなになれる理由がない、幼稚園保育丈けが、獨り子供の個人性の制限を免れるべき理由のないことは明な次第である。まして、教育といふものは、いろ／＼の力が寄り合つて出来るので、幼稚園へ行つて居るからといつて、其時の教育の力は、幼稚園丈けでない、此時分の家庭教育の力が、甚だ大きな働をしてるので、幼稚園は言はゞ、其手傳たるに過ぎないのである、夫に向つて、右の様な望を囑する事の、頗る過當なことは申すまでもない。も一つ考へなければならぬ事は、幼稚園保育の方法である、どれ程、目的がよくつても、方法が至つて居ねば駄目である、幼稚園で子供を保育する方法は今日十分至つて居るかどうかといふことは

間はずとも知れて居る、かゝる方法の下に、以上の望を達しようといふは、そもく又無理である、但し、方法は漸次改良が出来るにした所が、前述の二つの理由は、到底取り除くことは出来ぬ、次に、又幼稚園保育の効果を餘り過小に見る人がある、幼稚園なんて詰らない、何の益にも立つものではない、其證據は、小學校に來てからの成績はどうか、他から來た生徒と餘り優劣がないではないか、否、時とすると、幼稚園から來たのは反つて成績がよくなくて、落第などするではないかといふのである。然し、これも、つまる所は、前に述べた幼稚園に向つての要求の適當なものと、同じ理由で、不當だといふことが出来る、幼稚園から出るものは、悉くエライ者許りでないことは明白である。其中には詰らぬ者があるからといって、幼稚園の保育は、何の益にも立たぬといふのは、間違つた話といはねばならぬ。

要するに、幼稚園保育といふもの、効果が非常に、過當に考へるの、間違つて居ると同時に、之を過小に考へるのも同じく間違つて居る。よくても、悪くても、獨り之を幼稚園の責任と考へることは出来ぬと同時に、一體、教育といふもの、結果は、今といって、今すぐ顯はれるものでない、幼稚園を出て、小學校に行く、行つてすぐ幼稚園の成果の見えることを期望するのは、餘り近愆すぎる、此の様な近い結果を期望する所からして、間々幼稚園の仕方は智育に傾き過ぐるといふ弊に陥るのである。教育の成果といふものは人の一生の永い間に顯はれるを期せんければならぬ。

故郷といふものは、いつ／＼までも、人の思想を支配するもので、五歳六歳の時、故郷を出て、一生、他郷に流寓する人でも、其幼い時に受けた、故郷の感化は、生涯、其人を去らない、思一度、故郷に至ると、此處の小山、彼處の小川、遙か彼方の鎮守の森や、直き裏の稻荷の宮など、夫から夫へ曆々と胸に浮び出ると思ふと、あの日は友の誰と其處でどんな遊をした、この日は此處で、村のお老翁さんとなん話をして面白かつた事などが亦、かすけくおぼろげに然も確に思ひ出で、は繰り返される。故郷といふことに伴ふこれ等の印象、早く小さい頭に深くも、刻まれたこれ等の印象は、實に、其人一生の思想を支配するもので、其人の善悪の性格は、其大部分は確に、之等の印象から影響せられるといふことは疑ない事實である、然かも、其當初に於ては、之等の影響の結果は、そう著るしく見られないのである。而して其價値は、實に、其見られない所にありと思ふ。幼稚園は、或意味から見、教育上の故郷と見たらば極めて穩當だと思はれる。

(牧)

羊)

婦人と迷信

市川源三

十九と三十三とは女の厄年、死なぬまでも必ず災難には遇ふといふ。何故かと調べてみれば、十九は重苦で、三十三は散々であるからだといふ。甚だ馬鹿げたことではあるが、之を眞實であると信じて居る人がある。殊に女の方に多い。總じて女の方は迷信が多い様である。熱心に神佛を渴仰するものは婦人に多い。わけても天理教、蓮門教などいふ迷信に近い宗教の信者は、多く婦人である。お圃を引くもの、賣下先生の前にたつもの、家相を見て貰ふもの、御弊をかつぐもの、観音・辨天・稻荷・不動等の前に平身低頭、合掌祈願するものは、婦人に多いであらう。勿論、教育を受けて居ると居らぬとによつて非常な相違はあるものゝ、

教育を受けたもの同士、教育を受けぬもの同士の中で調べて見ても、矢張婦人の方が、男子よりも迷信に陥りやすいやうに思はれる。

いま、右の臆説を正確なものとして、何故婦人は迷信に陥りやすいのだらうと考へてみよう。然し、それを考へる前に、まづ、すべて迷信に陥るのは、どの様な因縁理由によるだらうかを調べてみよう。

一、理に暗いもの、物の道理が解らぬものは迷信に陥りやすい、これは説明するまでも無からう。然し、物の道理が解つて居ても、尙折々迷信に陥ることがある。又、それと反對に、理に暗いものでも迷信に陥らぬことがある、凡夫盛りに神崇りなしと曰ふ諺は、よくこの事實を示して居る。又、病氣になるか年が寄れば、とかく迷

信に陥りやすいものであるが、これは病氣になり老年になつて、知識が無くなり物の道理に暗くなつたわけでも無からう。又、切ない時の神頼みといふ諺がある。これも、理に暗い暗くないには關係が無いやうである。

二、獨立自主の傾向の少ないものは、迷信に陥りやすい、身軀も丈夫で無く、氣も弱いものは、とかく迷ふ。年が寄るとか、病氣にかゝるとかすれば、その昔若いとき、丈夫であつた時、迷信だと嘲けたことをも信ずることになる。又、氣の弱いもの即ち意志の弱いものは、強ひて自分の考へを仕遂げやうといふ勇氣が無い、かういふものは、迷信とは知りながらも、ついに、それに引き込まれて了ふ。例へば、鬼門といふことは、迷信であると思つて、斷然排斥して了へ

ば、所謂斷じて行へば鬼神もこれを避くで、何のことも無いが、萬一意志が薄弱であると、それがため「理論上、その様なことがある筈は無い、然し、世間で皆いふことであるから、或はさうかも知れぬ。萬一、不幸なめに遇うては、取り返しがつかぬ。又、世間の人も、そら見たことかと云ふであらう。さうなれば、少し位的不幸よりも、他人の口がうるさい」と、かう思うて、遂に眞の迷信に陥るやうになる。

三、客取り商賣するもの、これは、多く迷信に陥りやすい。商人は農夫よりも多く稻荷や不動を祈る、藝妓藝人は工女工夫よりも多く物忌み祈禱をする。これは、何故かといへば、自分の店の繁昌し、自分が利得を得るのは、單に物品を精選するとか、價格を低廉にするとか、客を親

切にするとか、自分が餘分に働くとかによらぬ
 ことが多いからで、所謂大當りといふのは、一
 つは運である、運は人力の得て左右出来ぬこと
 であるから、そこで自然と神佛の力を借りる氣
 になるのである。その上怠惰者は汗水を流すよ
 りは、御祈禱する方が樂であるから、ますます
 神佛に依頼する氣になるので、つまり怠惰者の
 神信心といふわけであらう。

四、すべて、何事でも、氣にする人は迷信に陥り
 やすい、喜怒に哀樂に切なものは、迷信に陥り
 やすい。人生は、もともと喜悲苦樂に満ちたも
 のである。嬉しいと思へば、悲しいことも樂く
 なり、悲しいと思へば、樂しいことまで悲しく
 なる世の中。些細なことには頓着せず暮す
 のが眞の樂天といふもの、それを何かにつけて

氣をもむものは、嬉しいことであらうが、悲し
 いことであらうが共に苦しみの種となり、やが
 ては迷信のもとなるのである。

五、度々失敗したものの、度々不運な目にあつたも
 のなども、迷信に陥りやすい。これは、獨立自
 主の傾向を失うたからであらう。即ち失敗の
 ずくが人の自信を奪うたのであらう。

以上のべた所をつまんですると
 凡て、理にくらいもの、氣の弱いもの、身軀の弱い
 もの、氣の小さいもの、客取り商賣するもの、こ
 れらの人々は迷信に陥りやすい。とかういふこと
 が出来る。

そこで、婦人に迷信の多いわけを説かう。

一、婦人は割合に理に暗い。のみならず、理窟を
 面倒がる。事物について潜思熟考するといふ根

氣が無い、一寸考へさへすれば、直迷信である

と知れることを、かれこれ理窟をいふのは面倒だといふ。又、他人に聽いて見れば、すぐ誤解である。と知れることでも、面倒がつて質問せぬこれが婦人の一般の缺點らしい。

二、婦人は獨り自ら意見をたてるといふことを不安心に思ふ、それ故、世間にいふことと聞けば

一も、二も無く信ずる。婦人に流行を追ふものが多いのは、一つはこれによるのであらう。

三、婦人は自己の幸福を自己の手と足とでさめることが出來難い。所謂「一生の禍福他人による」

である。この處は、客取り商賣するものが、迷信に陥りやすいのに似て居る。

四、婦人の身軀も弱く、その上、妊娠といふ様なことがあつて到底他人の扶助を仰ねがばならぬ

位地に立つて居る。

五、所謂「妻は夫權に服従す」で、妻は獨立に考へ、獨立に行ふことが出來ぬ。これは、度々失敗したの人の場合に似て居る。總じて女は人の妻となるべきもの、ならぬまでも妻となれるやうに教育されるものであるから、女には男ほどの獨立特行があるはずはないのである。

六、婦人は小さいことに氣を揉むものである。これも迷信に陥りやすい理由である。氣を揉むことの多いのは、つまり意志が薄弱であるのによるのだらう。但し、この點は婦人の本性か、それとも以上五項の結果であるか、研究を要することである。

要するに、婦人の教育と婦人の社會上の位地とを現在のまゝにして置いては、婦人に向つてその迷

信を嘲けるわけにはならぬ。もし、之を嘲けるならば、男はよほど譯のわからぬものといはねばならぬ。

A woman when thinking by herself is always thinking of mischief.

婦人の獨り思に沈むや、常に害惡をのみ思ひつゝいくるなり。

よき家庭　うばら

よき家庭は少いものだといふお話は、いつも私共の承はる事でございますが、どうかお互に氣をつけてよく致して行きたい事と存じます。それにつきまして、ここに記したいと考へますのは、私の友達の家庭の事でございます。

世間では間々子供といふものは、學校や幼稚園で

こそ先生のいふことはよくきくが、内では中々そらゆかぬ、又そう行かぬのが至當であるといはれる方がありますが、なる程、家庭に於きましてはいろゝな事情がありますから、いくらか實行がむづかしいといふこともございませうから、無論方法はちがへねばなりませんけれども、學校や幼稚園で出来る事が、内で出来ぬ筈はないと考へてをりました。所が、今述べようといふ友達の家庭では、夫がまことに都合よく行つて居りましてかねて考へてをりましたことの證明が出来ましたことで誠に喜ばしく存しました。

そこで、先づ其家庭はどんなかと申しますと、今年十六になられる男のお子さんを始めとして、二男、三男、四男と末に三つになる女のお子とがおります。御主人は職務がありますが大概毎日内に

居られますから、此大勢のお子さんたちはまづ兩
 親の温かいお手で育てられることでございませう。

そして月島に地所がございましていつも大勢揃つ
 ては船でそこへゆかれるといふことで。

先日私が参りました時は丁度いつもの様に大勢の
 お子さんをつれてその月島へ行かれようとする所

で、御主人は私にも行かぬか、といふ、若し行く
 ならば奥さんも行かれるとのことでありませう。月

島といふ所へは之迄一度も行たともありません、
 又向うへ行つての遊びの有様も見たいと思ひまし

たから誘はれるまゝに私は喜んで同行を願ひまし
 た。そこで御主人は大勢に向つて「さあ、月島

行の用意」といふ命令を下されました、するとふ

だんから、ちやんと極めてあるものとみえまして
 其命令が下るとすぐ皆それぞれ自分のすべきとを

迅速にして仕舞つて、めい／＼權を一つづ／＼擔い
 で出て行かれました。すると御主人は片平に籠を
 持たれる、之は向ふで野菜を取つて入れる爲めな

ので、又奥さんはお菓子を用意などをされる、何
 やかや致してやがて一丁斗もある河岸へ参りまし

た。此のお住居は築地に近い所でございませうから
 私が参りました頃には、早や先着のお子さん方は

面白そうに、一生懸命船の支度にかゝつて九つに
 なるお子迄が棧橋をかけるやら、何やらせつせと

働らいてをられました。用意が萬端齊つた所で、
 尙暫く待つてをります中に、潮も満ちる、もうよ

ろしいといふことで、私は奥さんと一所に其船に
 乗りました。皆が乗り移つた所で、御父様の命令

で船は動き始めました、一番長男の方が艫をおす
 役、次男、三男、四男の方々が左右に別れて權を

把て腕の限りと漕ぎ出す中にも御父様のお指揮で
 或者は休み或者は漕ぐなど一々命令通り其の上命
 令に従つて何事も一々熱心にされる様の可愛らし
 さはとても拙い筆では表はすことが出来ません、
 私は此時、此有様を見て不圖思ひ出しました、大
 小のちがひこそあれ海軍の方々が、長官の命令の
 下に種々の任務に就きて忠實に御務めになるのは
 全くこふいふ風だらうなど、思ひあはされました
 程で思はず感涙を催しました次第でございます。
 こんなことを思ひつけけてをります内に、船は月
 島へ着きました、一同上陸致しましたが、その地
 所の内には親戚の方が住んでをられました、雞を澤
 山飼はれて居ます、そして此方々は相當なよい身
 分の方であります、皆様が御自身に雞の世話をし
 てをられます、私はこれにもまた感服致しました

さてお子さん方は、上陸して御挨拶がすむとろく
 に休もなさらずに畑へ飛んで出て、誰は草をとる
 誰は菜をつむ、誰は肥料をやるといふやうな工合
 に各自分れてそれぞれ仕事にかゝられました、
 まことに圓滿で、ひだ口をきいたり、いたづらを
 するやうなことは更になく、中々勉強して其仕事
 に付かれるのであります、私はあちこちへ行ても
 う何から何まで感心して見てをりましたが、やが
 て葎畑の側へ参りますと、九つになるお子が「お
 ばさん上げませう」といひながら一つの眞赤にな
 つた覆盆子の實を探つて下さいましたからありが
 たうといつて載りますと「此處から此處迄の間の
 赤いのなら、いくら探つてもよろしうございま
 す」と申されますから何故ですかと聞きました所
 が、其の畑は兄弟に分配されてゐるので、そこは

そのお子の領分だとのことでした。これを聞いてその小さい親切な心は毒の實よりも赤いことや、

又猥りに他人の領分を犯さないといい正直な所なとを考へ合はせまして、何や平やいろ／＼の點から、今日一日私は無邪氣な神聖な丸で天の世界にでも遊んだ氣か致してをりましたが、餘り私の歸りが遅くなつてはならないからといふのでまた船に乗つてかへりました、船中のさまは始めの通りでございました、限りない愉快を得ましたこととございまして、

これは又、前に參つた時でしたが、皆で謠をして聞かして下さいましたが、大きい方から行儀能く順にならんで臆さずに真面目にうたはれましたさまは、思ひ出しても可愛らしく存じます、併し強て教へられたのではなく、御父様のなさいますの

を段々に聞いて居られて覺えたのが多いといふこととございまして。

かやうに勉強で、柔順で、又勇氣もあるといふことは餘程よく躰けなければ出來ぬこと、思ひます、唯私のみました所では遊ぶは勿論、仕事をするにも出来る丈夫供と一所にする、能く和してゆくといいふことに外ならない様でございました、とても親は親、子は子といふやうになり其の上、召遣の者などにまかせ勝などでは、よく育てるといふことは六ヶしいこととございませう。

以上は前の月フレネル會席上に話したる大要なり。

家庭に於ける所感 (二)

長野縣長野市 飯塚忠次郎

(二) 家庭の二大別

(イ) 〇〇〇〇の家庭、とは希望ある家庭をいふので、
 陰陽からいへば、陽、即ち黄金時代である。かゝる家庭の中には、暖き光みら渡り、愛の泉はわき出で、たゆることなく、清らかなる微風吹き渡り花笑ひ鳥唄ひ全家族恵の露にうるほひ渡るといふ長閑なる福音ある、丁度天上の樂園の様な言葉をかへて申すと、其家の人々の精神が皆同一の方向に依つて進み、岐道をとらぬ、恰も完全に製作された筆の如くに、毛なみの先がよく揃つてゐる逆毛のない筆と同様な家庭である、(完全に出来てゐる筆で以て文字をかく時は、筆は全く自分の思ふ様に働いて文字がきれいにできるのみか、見たところでも何となくよい。之れに反しまして不完全な筆では、自分の思ひどほりにかきたくても僅か一つか二つの逆毛のために、筆のさが甘く走り

ませんばかりか、みぐるしいへんてこな文字がで
 きわがつてしまします。

さて、右申す様な平穩な家庭、區々たる事情の爲めにいさがへをせぬ、表裏なき整然として常に團
 樂和樂せる風儀の正しい家庭、此様な家庭に朝夕
 逍遙して、日々暮してゆかれる人々は、私の眼か
 らみたなら最も幸福な方と言はなければなりま
 せん、かゝる家庭に入る時は如何なる人も自から
 伸らかに清くなつて、世の憂き節も忘れてしまいま
 すと云ふ實に純良潔白なまぢりけのない家庭一言
 にて云へば健全な光明ある家庭である。

口〇〇なる家庭、世間一般にわがちな家庭で、
 陰陽から申そうなら陰、暗黒時代を演じつゝある
 枯野的の、ごく淋しい鳥も来てうたはうではなく
 花もさかぬと云ふ、何となく平穩ならざる家庭、

一家の進路が全一でない、お互に木の枝の様にま
ちまちな方向を取つてゐる、即ち逆毛筆である、筆
なら逆毛の毛だけぬきとると云ふこともできるが
悲しいかな人間はそうはゆかぬ、此の如き家庭で
は少の事にお互にがやがやいつて争つてみたり、云
はなくてもよいことをいふて人の感情をそねて
見たり、各自べつべつ、一致しない恐ろしい浪
は家中にたかまり恐るべき嵐の吹きさすさぶといふ
不健全な家庭である、此様な家庭に養育を受けつ
ゝゐる人はどう致して高潔正直な人になることが
できましようか、此様な方は實にお氣毒なわけ
で、皿にもつてある毒を知りつゝなめるも、同様で
あります、かゝる家庭に限つて、いひつけぐち、壁
訴語、耳こすり、なぞと種々様々な言ふに堪へな
いもの、製造所となつてしまつて、家中は山犬を狼

の様なあさましいもの、競争場となつて、實になさ
けない家庭となつてしまつたのである、一言にて云へ
ば恐るべき希望なき哀れなる家庭である。
余切に世人に望むのである、活眼を啓いて現時家
庭の状態を熟視致しましたら、どの様で御座いま
しよう、千差萬別とは云ふもの、其多くは紛糾錯
綜殆んど口に言ひ文に綴る由がないのです、家庭
の紊亂は概して運轉手たる者の運用如何に因るも
のとは申すもの、相互の間の我慢のあづかつて大
なるのである、畢竟家庭の風波軋轢を惹起するの
は家人皆相互に緩急相救ひ苦樂相分つといふこと
を念頭に留めず、徒らに自己の嗜慾をのみ專にせ
んとする所から起るのである、圓滿なる家庭は一
家振興の基、不和なる家庭は滅亡の礎、此様なこ
とはよく人々の知つてゐるところで、今更こと新し

く申すまでもないが然し其實蹟を見ることは殆ど
稀れである、慨歎に堪えない事である

(未定)

割烹十二月月附録

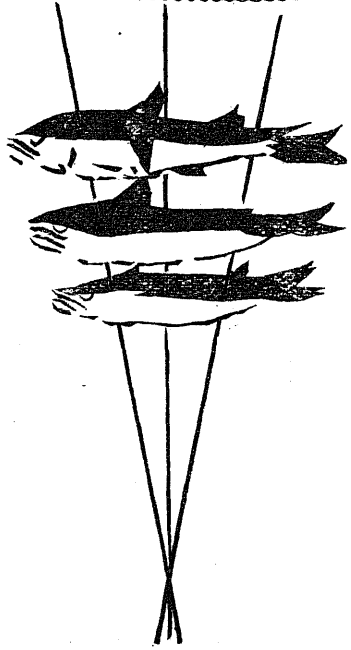
季節料理

石井泰次郎

◎鹽焼の鮎拵方

鮎のわたらしきを鱗をよき、腹をひらきて腸を
去り、ゑらを出して、水にて洗ひ、鹽をよりつ
けて暫くおくべし、さて鹽をさつと水をかけて
流して、金細申にさして(申にさし様は圖の如
し)、鹽をさつとふりかけ(手につかみて指の
間より、おとすやうにふる)中火にてやく、ま
づ表となすべき方を焼て、次にそりたるをうら

がへしてやく、又焼たる頃、表をかけてやき、
再うらがへしてやきて、板の上におろして、そ



つと左の手の指にて押えて、右にて捻りて、次
に抜くべし) 此時も表になす方を上になしたる
心得にて板の上におくべし

◎白煮姫百合根の拵方

- 姫百合根 七個
- 砂糖糖 十四匁
- 白味淋酒 四勺
- 食鹽 一匁五分

水みづ 四勺 美濃紙みのがみ 半枚

姫百合ひめゆりを洗あらひて、根元ねもとの堅かたき所ところを、小刀こがたなにてく
り去さりて、竹たけの皮かはを細ほそくしたるを以もつて縦横たてよこにく
りて、湯ゆの鍋なべに入れいれそろ／＼煮にて、柔やほらかに
し、湯ゆの中なかより上あげて、一ひとつつ菜箸さいしほにて狭はさまみて
別べつの鍋なべにうつしてよし 扱さ砂糖とうと水みづと鹽しほと味淋みりん
を調合てうごうしたる中なかに入れて文火ぶんひにて、美濃紙みのがみを中
ぶだにいれて煮にるべし、煮にて皿さらに取とりあげて、冷
して後のちに竹たけの皮かはをそとと取とり除のぞくべし、いかにも
くづれざる様ようにすべし

◎覆盆子いちぢか羹かんの拵こしらへかた

覆盆子いちぢか 中玉 二十個 白角寒天はくかくかんてん 二 一本
水みづ 四合 寒天用 砂糖さとう又また三盆糖 六十匁
水みづ 五勺 砂糖用 味淋酒みりんすけ 三勺
食鹽しょくえん 一匁

いちぢかの中玉ちゅうたまを筴さなどに入れ、上うへより水みづをそ、
ぎて洗あらひ（能々水よくくみづをかくるのみ）、手てに取とりて、一
つ一つうてなを取去とり○白角寒天はくかくかんてんを水みづに浸ひたし、
能く上面じょうめんを洗あらひ、暫しばらくく漬つけおきて、取とり出し、能く
しばりて、堅たてに細ほそく切きつて、一所しよに持もて、小口こぐちに
極きまめて細こまかにきざみ、水みづを鍋なべに入れたるに入れ
て、煮にとかすべし。寒大一本かんだいほんを溶解ようかいすべき水量すいりょう
は二合にごうとす、○白砂糖しろさとうを鍋なべに入れて、水みづを入れ
煮にとかし、絹篩きんせしにて右みぎの寒天かんてんのとかしたる中なかに
漉ここみて、煉合ねりあす○かくて煉合ねりあしたるを流ながす箱はこ
に半量はんりょう流ながしこみ、其中そのうちの少し堅かたまるほどを斗はかり
て、覆盆子いちぢかを入れ、少しして、箸はしにていちぢかの
位置いちぢかのをととのへ、上うへより殘半量のこりはんりょうを流ながし入れて
箸はしにて覆盆子いちぢかをかさへて浮うかぬやうにして、箸はしを
どけて冷ひやしかたむべし。

◎ 播玉子の拵方

ケツリ鰹魚 十匁
水 四合

醤油 一匁八夕
味淋酒 一匁二夕

食鹽 五分余
(以上汁の原料)

玉子 大一個
醬油 五夕玉子入

葛粉 代リカ
水 八夕カタクリ入

山葵 一本小

鰹魚伊豆小アシ温湯に(四十度位)浸し洗ひて、白
き皮を出刃庖丁又小刀にて削り去り、上面を一
面かんなにて削り去り、それを別になし置て、
わとをよく薄くけづるべし、厚さと薄さと交れ
ばわし、〇鍋に水を量入て、養たて、(九十五
度位)、右のけづりぐつを入れ、直に極めて細き
金鋼抄子にて泡をすくひ去り、鍋を乾ろして、
蓋をなしすこし置て洗みたる時、絹篩にて器中

に漉こむべし、

玉子を一つ一つ割て、小器に入れ、大器にうつ

し、うつし、一所になし、箸にて掻まぜて、

醤油を合せて、再びかきまぜかくべし。

葛粉 カタクリチ用フを、器に入れ、水を量り入れ

て掻まぜ、上のちりをすくひ去りてよし山葵を

水にて洗ひ、出刃庖丁にて飯粒いぼをけづり

さり、上の方へとけづりとがらして、其方より

おろすべし、おろして、板の上にて庖丁刀にて

たゞきて用ふるなり

◎ だしを鍋に入れ、養たて、醬油を入れ、次

に味淋を入れ、次に食鹽を入れるべし、叔味をこ

ゝろみて、加減すべし(初より醬油のみに分量

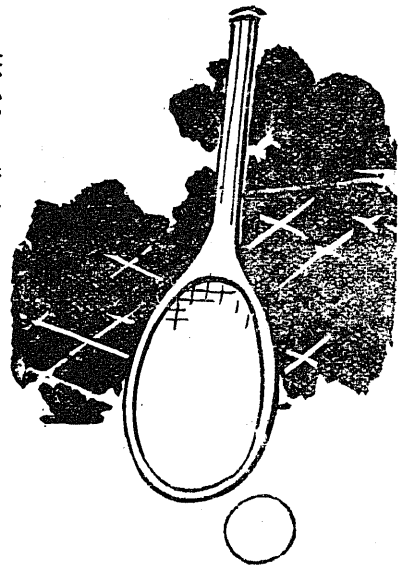
通りにいる、事なかれ、味を試みて後に分量通と

なすべし)(又地方により醬油の品もことなれば

分量も考へ合すべし、こゝに云ふ所は、**園**の醬油を以て分量せしものなり、それより、葛粉カタクリコのときたるを掻めぐらして、其器を左手に持ち、右手に抄子を持って、鍋の底を掻めぐらしながら、左手の器より粉を流し入るゝなり、次に、左手にときたる玉子の器を持って、右の手に目ある金抄子を持って、鍋の上にあてゝ、左右の手を同時にめくらす様にして、右の方へとめくらしながら、左手の器の玉子を右の手の目抄子の上へと少しづつたえず流し入るゝなり、めくらしかたあしければ、目より多く一所に出てあしゝ、よくめくらすべし、さすれば細く出てよし、次に直に鍋をゑるして、椀にもりて、わさびを上にかきて蓋をして出すべし

貞一の日記

その母



貞一は、明治卅六年五月卅一日午後一時卅分、本郷龍岡町の寓居に生れし、吾家の長男なり、怡其日は舊曆の端午の節句と、日曜日、當りし故曾祖母の君と伯父君は、端午の端句に、男兒出生とは、誠にめでたし、ゾンタッハキンドとはなほさらなど、祝ひよこさる。父にも母にも、親族一同

にも、待設けられしことゝて、幸福なる吾兒は、
来る人ごとくに、喜びの詞もて、歡迎せられぬ。其
後發育も充分に、これといふ、病もなく今年や
うく、滿一年の誕生日をひかへぬ。其間の養育
のあらましを記せば

榮養 生後八ヶ月までは母乳ばかり、九ヶ月の
初よりは母乳を一回減じて、玄米の朮もゆ、鯉節
のスープ、白米をいりてそれをよく煮出し、おも
ゆ、などをまぜて與ふ、十一ヶ月の初よりは、母
乳を二回、減じて白かゆを、すいのでよくこし
のりの様にどろどろしたるものへ、鶏卵の黄味の
半熟をまぜて與ふ、此兒は天性牛乳を嫌ふ者か、
種々の手段を、つくして與へても、少しも飲まず
鶏卵は大好物なり、哺乳の時間は、正しく守つて
時間外には泣いても、乳にて機嫌とりし事なし。

睡眠 初より晝間は、余り眠らず、夜はよくね
むる、此頃は晝間午前に一時間位、午後に一時間
位、夜は、十時間位眠る。始より母に添寝せし事
なし

沐浴 生後五十日間は、毎日産婆湯をつかはす
其後は、殆ど毎日、祖母と湯に入る、十一ヶ月の
初より、父と始めて洗湯に行く。

種痘 生後六ヶ月に接種す。左右とも、二顆ツ
善感

父も母も、晝間大方は外に出づるもの故、細なる
發育の模様など一々精密に觀察せん術もなし。生
後、凡そ四十日間の觀察、殊更十分ならず。次に
四十六日目より、滿一ヶ年の間の發育の狀況の極
めて大略を記す。但しとても精密なものにあらす

四十六日目 祖母に抱かれ居りし時、傍なる母の

呼ぶ聲に應じて、首を回らし笑ふ。

五十日目 体重 五、〇四〇

六十日目 ハンモツクにのせられて、よく笑ふ

六十一日目 四五尺離れし所の、赤色の翫具を見

るに頭を前後左右に動かす。

六十五日目 始めて、手を握りて吸ふ。

七十七日目 ウー〜と語る

八十六日目 体重 六、一八〇

八十七日目 風鈴を見て、喜び、ビヤノの音をき

ゝつけ其の方向を、たづぬる様子あり

九十二日目 身長二尺八寸、胸圍一尺三寸七分、

頭圍一尺四寸四分

九十九日目 新聞をつかみて、口に入れんとす。

百三日目 頭首を真直に保つ

百四日目 瞭然に確に立つ

百廿八日目 体重 七、五〇〇

百六十七日目 八、一〇〇

百九十二日目 八、五〇〇

二百二日目 兩足投げ出して、座る

二百廿日目 バア〜アー〜と語る

二百四十八日目 おもちやの笛を吹く、但し吹か

うと思つて吹きたるにあらす、吐く息に由りて

自ら音を出させたる様なり。

二百五十四日目 ビヤノに向はせしに、兩手にて

叩く

二百八十七日目 イヤ〜といへば、頭を左右に

振る

二百九十四日目 下の前歯一枚見ゆ

三百七日目 片膝を立て、ゐざる

三百十七日目 四つ這になりて、あとしさをなす。

三百廿日目 下の歯二枚になる、机障子などに、

つかまりて立つ

三百廿三日目 机障子などに、つかまりつたひあ

りあす

三百卅一日目 オイデくを覺ゆ

三百卅二日目 手放しにて立つ

三百四十三日目 上の歯一枚見ゆ

三百五十九日目 萬歳といへば、兩手を高くあぐ

三百六十一日目 上歯二枚になる、オツムテン

くを覺ゆ

滿一ヶ年と十日目 体重 九、七四

一年間、二三回風邪と藤加答兒とにかゝりて、

醫師の診察を受く、其他に著るしき疾病なし。

卅七年五月二十七日 (晴) 朝早く起き、父の枕元に座りて、自轉車のポンプを持ちて遊び居りしが、やがて、ランプを見付けて、這ひ寄りて取らんとす。

食時の時、粥を一皿食べる。

夕食後、父のテーブルの上に座りて戯る、唱歌を歌ひ聞かせれば、しきりに、ムヅカリし故、ピアノの側に行きて腰を掛ければ、キャツクと言つて喜び、やがて、ベースの所を兩手にてジャンくいはせて喜び居りしが、果ては、人の手を押しかけて、己れ一人にて占領せんとす

今日洋服屋來り貞ちゃんの夏服を持參せしが、小さくて着られず、失敗つたりとて持ち歸る、今朝、食事前、父に抱かれて、門に立ち、遙に遠き彼方に烏の二三羽飛ぶを見付け、ヤーク

とほ

と云つて、兩手を伸ばして取らんとす。

此頃貞ちゃんの好きなことは、表に出ること、お湯に入ること、好きな玩具は、お父さんの自轉車に乗る時のツボンしめ、鏡、お箸母の懐中時計（玩具の時計は氣に入らず）湯豆腐をすくふ金の網などなり。

五月卅一日 今日には貞ちゃんの誕生日といふので本郷のしいちやんとおつ母さんとお招きして心許りのお祝ひをなす、しいちやんは、今年、尋常の一年生なり、紙の風船を持つて來て、貞ちゃんに呉れるといふ、投げ合をする様な風をして喜ぶ

六月六日 座つて、菊の花をむしつて遊び居りしが、やがて、花瓣のなくなりしとてか、泣き出したれば、其代はりにとて、撫子花を與へしむ

そをすて、やはり坊主になりし菊の花を離さず、てうち〜といへば、そを片手に持ちながらなす、おつひてん〜も同じ。新聞を渡せばそれを持ちながらジャイ〜といつて喜ぶ

六月七日 パーやと座敷の庭に向ひて座つたまゝ、庭先に置きある乳母車を手にてあちこちに押し動かして喜ぶ、危きまゝ、脊中のつけ紐をとればエー〜といつて、パーヤの手を退けんとす、又、車に、手を觸れても氣に入らず、獨りにて動かさんとす。

六月九日 父母に伴はれ、ばあやに負はれ、本郷の中黒に寫眞をとりに行く、最初、貞一獨芝生の上に、足投出して、座れる所は、大人しくとらせしむ、父母と三人にて、うつせし方は、中々わばれて、寫眞師も、持てあませし様子なり

しも、漸くおもちやにて、機嫌をとり、寫しをはる。

六月十日 毎月十日は邸内の金比羅様の縁日なり

今朝、食事前、いつもの様に、お父さんに抱かれて門を出で、やがて、金比羅様に行きしが、

神前の鈴のがらくと鳴るを聞き、不思議そう

に上を眺め居りしが、暫らくして、忽ち父に抱

き付きぬ、聞きなれざれば、恐ろしと思ひしな

るべし。

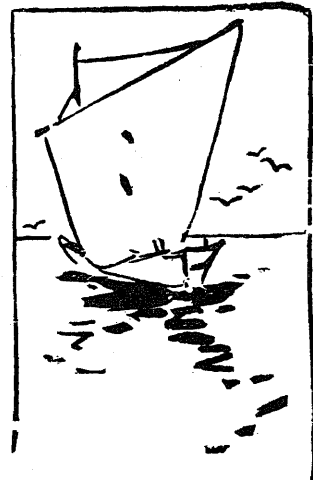
夕食後、父に抱かれ母と共に金比羅に行く、隣

家の三郎も、其母に抱かれて、神樂を見て居た

り、貞一の母三郎の傍に行き、三郎を抱かんと

て手を出せしを見て、貞一は、聲をあげて泣き

出す



決死隊

佐々木信綱作歌

天皇と國家とに盡すべく

死地に就かむと希ふ

二千餘人の其中に

七十七士ぞ選ばれし

二

今宵ぞまさに軀を棄て、

旅順港口閉塞がむと

忠勇無二のつはものは

今しも船を去らむとす

三

出で、ゆく人送る人

語はなくて手を握り、

別れを告ぐる真夜中を

マストの上の星寒し、

四

浪の穂のみぞはの白く

あやめもわかぬ海原を

舷燈消してしづくと

死地に乗り入船五艘、

五

さつと閃めく探海燈

忽ち起る砲の音

敵は驚き騒ぎつゝ、

所定めず打出す

六

砲弾は霰と降りそゞぎ

海波立つ事三千丈

彼方此方を照り交はす

探海燈の物すゞぎ

七

何しに擾亂ぐ敵壘ぞ

可笑き敵の振舞や

鐵よりかたき此心

彈丸もいかでか貫かむ

八

敵の砲火を侵しつゝ、

港口深く進み入り

我船沈め歸りこし

わが忠勇の決死隊

九

わゝ勇ましの決死隊

七十七士の忠勇は

わが海軍の花にして

其名薫らむ万代に

青葉集

其の子

▲夏の飲ものは、麥湯こそよけれ、さる家にては
玄米を煎りて煮たる汁を茶の代はりに用ふと聞
侍り、

▲早くより子供に博物理科の思想を養はんことと

そ望ましけれ、さりながら、虫類を捕り來りては

ピンにて其脊中を刺し通し、幾匹も并べて美麗

なる額に仕立て、室内を飾るなどは望ましからぬ

業なり、さるは生ある動物を骨薫品と同視するな

り、研究にもあらず、動物を虐待するなり。

大人にもかゝることを娛樂とする人あり。

▲子供を研究することもよき事なり、されど心せ

ざれば、之と同じ過に陥るべし。

▲梅雨のづれゝなるまゝに、かきふるしたる反

古などを、文庫の中よりより出でたる中に、次の

文句ありけり

あはれに、悲しく聞かるとは、月いとさえたる

霜夜に、下駄の齒音高くひやかせながら、大路

を流し行く按摩の聲、まだ、明けやらぬ冬の朝

風の、音の絶間を流れて聞ゆる納豆賣る子のか

ん走つたる聲、秋の夕の尺八は、殊にあはれ深し。すさまじきものは、白粉こくつけたる女の、襟くび丈けは、忘れてか其儘に残したる、男のカラーの褐色になりたる、袴もなき和装の貴女の舞踏、さては、女の憤怒りたる顔こそ、いみじくゆゝしきものなれ、男もさらぬにはあらねどこれは猛きが常なるに、女は柔和をもて本性とすればことさら、

▲無邪氣なる幼児の天真爛漫なるこそ愛らしけれ一角分り盛りりの男女の、他人の感情、思はくの如何をも願みす、ひたすら、己が思ふまゝをいひ、感するまゝに振舞うて、人は兎角、包み隠しなき天真爛漫こそよけれなどいふ、いみじく悪し。世には、眞實さらぬも、ことさらにかく装ふ人ありこは非事なり、とかくは磊落を装ふ人ほど、俗の

結晶體と知るべし。又、眞實、天真爛漫らしき人もあり、ある文士は、かゝる人こそ、感情の訓練せられざる、憐れむべき人なりといへり、げにやかゝる人のみ、ならましかば、世はとこしへに争のみならまし。禮儀とは、或度までは、己が感情を包みかくすに在りと知らずや

▲可笑しきは、三歳四歳が程、外つ國に留學して歸朝りませる人の、始めて、日本に來り給ひけん人の風したることにぞある、さるはいみじくハイカレル新歸朝者の「左様、確か神田の錦町とかいふ町に云々」と語らるゝを聞き、覺えずもうちほゝえまれてかくなん。

○フレーベル會俳句端書集

一、課題 夏季雜吟一人十句以下

一、べ切 七月二十五日限り

一、披露 九月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本紙講讀者は何人にも投吟すること

を得用紙は端書に限り(可成繪端書に記載せられたし)住所氏名雅號を明記し都合上必ず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽 野 奇 零

●そのふりく 無一庵 奇 零

魚籠打や昨日の雨のうす濁り

願裏に取巻かれけり合歡の花

路次あけて客を通しぬ二十日草

釣竿に引よせて見るぬなはかな

避暑に行く箱根の路や蟬時雨

五月雨や舟へ積出す茶の火入

憂き戀に引さく文やほととぎす

水飯や鶯老えし山の寺

鞍すれをかゆがる馬や若葉蔭

植付ける小溝のへりや餘り苗

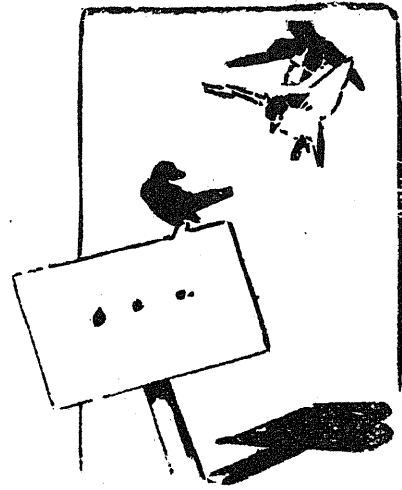
前垂に一つちざりて初茄子

月の出て居場所更へけり草

翡翠や川にのりだす瘡やなぎ

月下氷人に顔かくしけり絹うちば

●第六號俳句募集は豫告により第八號紙上に掲載すべし



一の組保育誌 (つゝき)

ふみ子

一 家庭に對する關係

家庭は中流の上以上のものにして官吏あり、會社員あり、商人あり、富豪あり、華族あり、教育家あり、宗教家あり、開業醫あり、軍人あり、種々なるがこれ等家庭の兒は概して入園前は家庭内

にありて兄弟姉妹と遊ぶほか他に友を有せざるもの多し。故に中流以下の社會の開放されたる家庭に生長せるもの、如く入園前已に社會の關係を受くるもの稀にして、單に家庭の影響を受くるもの多し。家庭の良否が此等幼兒に影響を及ぼせることの大なること今更茲に記し置く必要なし。されどこの組幼兒を保育すること茲に三年(一部分の兒は二年)漸次に幼兒を知り家庭を知ること深く、次で兩者の關係を知る度の進むに従ひて益々其影響の大なるを知る。

組中の男兒▲▲○○が誠實にして堅忍不拔の氣象に富めるが如き、ひとへに家庭の賜物なり。會て此の兒の父は返書用にと一枚の端書をいれたる一書を送られたり。(當時母なる人は病床にあり) 其文には「余は○○に向つて本日より幼稚園

にてかくくすべしと命じ置きたり、而して兒は歸宅後命の如くしたりと語る、實行の點に於て御知せを願ふとあり、尙事は些細なれども家庭にて不承知のため、兒に偽を通さず様のことわりては不都合ゆゑ御返書を煩はしたしとありき。あゝ其注意の至れる感ずべきなり其他は推して何ふを得べし。〇〇が衆にすぐれたる品性を有するも故なきにわらず。尙父なる人は陸軍に職を奉じ、刻苦勉勵其の結果遂に有益なる發明をせられし人、非常に繁忙なる生活をせらるゝ人ととき、而して兒の教育に注意せらるゝこと斯くの如し。

これに類する家庭尙三あり。
又反對に叱ることこれ即ち教育、子供を導くには單に口やかましく叱るといふ一法あるのみといふ様に考へ居る家庭二あり、これ等家庭の兒は非常

に廉恥心に乏しくしてすなをならず、天稟上其他いろくの欠點をも有せり。幸に屢々其母と語る機會を得たるをもつて、其都度折を見ては、幼稚園にこの取扱方はかくくとなり、絶えず子供を監視して叱りつくるは効なくして害ありと語り、少しはわが意を解されしかと思ふ折もありしが、歸りには同じく「どぞよろしく願ひますどうぞ澤山お叱り下さいまし」との挨拶にて實に失望なりかくて遂に三年を経過し目的を達し得ざりき。この言葉は只習慣上より來りたる一の挨拶なるか、はた我が話し方の拙なるが爲わが意を解されざるためか、其のいづれなるかは明ならざれども思ふに後者に屬するが如し。二の中一つは轉學前半年のころに至りて漸く實驗上さとりれしが如しといへども、他の一つは依然として元の如し。

又華族及富豪家の家庭にて子供の教育は思想の比較的進歩せざる老女、婦人等召使の手にありて凡ての思想幼稚園と大差ありしもの四五あり、左は何れも三の組二の組時代のことなれども一二の例をいへば或る兒は爪を長く生し居をもつて「今日お家にいらつしたらとつておもらひなさい」といへば「先生今日は何の日でございますか」といふ「先生は何の日か存じませぬよ」といへば私の家ではばあや(老女の名をいふ)がたつの日でなければとつてはいけませんと申します」といふ。又ある附添へこれは子供の教育の全權を有せるものは「先生に御話し申したうございませぬ」といふをもつて何事ならんかと聞けば「△△様は幼稚園ではあんなにおとなしくつていらつしやいますけれどもお家におかへりになりませぬと少しも私の申すこ

となどはおき、遊ばしませんで困ります」といふ。少し不審に思ひてどんな時にお聞きになりませぬかと尋ねれば附添の答は左の如し「御自分でお膳部をお運び遊ばしたり、お肴をお獨りでむしつてあがるとおつしやつたり、あれこれと其の邊の世話を遊ばして少しもおとなしくしていらつしやいませぬ。いくら申しあげてもおさへになりませぬ」余はこの言葉を聞きて半はよろこぶと同時に却て兒のために氣の毒に思ひたり。凡て此の種の家庭の兒は常に多くの召使にかしづかるゝをもつて依頼心の強きもの普通なり。故にこれを矯正し自ら活く様にしつけたしとの希望にて幼稚園にては幼兒自身にてなし得る限りは自らなさしめんととの考にて食事の際辨當の始末のごときは已に三の組時代より出來得ること丈はなさしめ又恩物、玩具の

整理室内の整頓のごときも力相當に助けしめたるなり。△△子が家庭に於ける行爲は恐くは幼稚園保育の結果なるべし。かくのごとき思想の衝突は子供のため甚だ不幸なるをもつて互に家風を語り幼稚園の保育法をかたりて漸次改むるを得たり。従て一の組に至りて以來は斯くのごときことを耳にしたること稀なり。又これ等家庭の兒は概して氣力に乏しく、同情心に乏しく、我儘にして物品を濫費する習慣あり、これ等の欠點は兒等が幼稚園保育をうけたために自然に矯正されし點少なからず、尙一のよろこぶべきことはこれ等家庭の父母が漸次に自分の子供の教育に注意せるに至りしことなり。以前は教育は全く附添人に托し置きて父母は全く放任せるもの多く、懇話會の時の如きはいつも代理人を送るを例とせしが、漸次に夫人

自ら來會し其他時々參觀に來たるに至れり。

以上の外三十余のものは、官吏、實業家、教育家等本園幼児普通の家庭なり、此種のものありては立派なる父母を有するにもかゝらず比較的其影響を受くること少く、却て善惡共に召使人の影響を受けつゝあること多きを見る。

何れの種類の家庭を問はず、幼稚園との連絡をたもとんとの考は大に進み來りしものゝ如く、たんに幼稚園にては大に便利を得たり。

女子高等師範學校附屬幼稚園

分室

女子高等師範學校附屬幼稚園に分室といふが有り今之を此誌上に紹介するに當り、まづ一昨明治三十五年末此園に於て定めたる保育要項中の組織の

項を記して、以て分室の性質、本園との差異を知るに便せんとす。即ち左の如し。

當園は年齢満三歳以上小學校に入學する迄の幼兒を收容する處にして分て本園及分室の二とす本園に於ては完全なる保育の理論に則り經濟の許す限り一切の組織設備を完成し其他の方便をして毫も遺憾なからしめん事を期し以て理論の完全なる適用を研究する處とす

分室は保育の理論の範圍内に於てなるべく簡單なる方便を以て實際の適用を研究する所とす。本園の幼兒定員は百二十名にして年齢に由りて三組に分つ。

- 一ノ組 滿五年以上就學に至る迄
- 二ノ組 滿四年以上五年に至る迄
- 三ノ組 滿三年以上四年に至る迄

分室の幼兒定員は六十名にして合して一組とす

右の如く分室の主意はなるべく簡單なる方法を以て保育せんとするにありて、從て經濟も出来る丈節約して、各地に普く設けられたき簡易なる幼稚園の模範ともしたき希望を以て、明治二十五年九月創立せられしものなり。滿三年以上就學迄の幼兒を合せて一組として保育する事、まづ小學校に言はゞ單級の如きものなり。而して保育料は徴收せざれども、之は決して慈善的に極貧の兒女を集むるといふ旨趣にわらず、入園を許可すべき者は少くとも修業年限三ヶ年の尋常小學校に入學して全科履修の見込ある者、といふ規定なり。かゝれば此分室に入園する者は多く中流以下の社會の幼兒にして明治三十六年の在園者五十名の内、之

を父兄の職業別にすれば

職工 二十六

商業 十七

車夫 九

雑 四

又右五十名を年齢別にすれば

五年以上 十五名

四年以上 十八名

三年以上 十七名

又之を男女別にすれば、男廿七名、女廿三名なり、

右五十名を保育するは分室擔任の保母一名及之を

補助する保母一名とす。此外に女子高等師範學校

本科生徒の敎生として實地練習の爲保育に従事す

るあり。

以下分室の現況を紹介するに當り、明治三十六年

四月より明治三十七年三月に至る一年間の分室保育誌に由り項を逐うて記さんとす。

一、受持保母及敎生の變更

前年度より引續き保母松村ひさ子分室を擔任し、又保育補助の任に當りし保母大島小春子は病氣の爲五月十一日以降欠勤遂に九月二十二日依願免官となる敎生の變更は三十六年九月より三十七年三月迄の間に三回あり、一回に六人づゝにて合せて十八名の敎生の保育實地練習に供したり。

(1) 保育課目

遊嬉 唱歌 談話 手技

右手技の中五年以上の者に課したるもの

積木 排板 排箸 畫方 摺紙 紐置 豆
細工 粘土細工

同上四年以上の者に課したるもの

積木 排板 排箸 書方 摺紙 紐置 排

貝 豆細工 粘土細工

同上三年以上の者に課したるもの

積木 排板 書方 摺紙 排貝

以上皆時に、木と板、板と箸、箸と貝、貝と

紐など、二種も三種も合せて用ふる事あり。

(2) 各課目時間配當

自四月十一日至五月十六日

午前八時半始午後一時半終

自五月十八日至六月三十日

午前八時始午後一時終

自七月一日至七月十日及

自九月十一日至九月二十六日

午前八時始十一時半終

自九月二十八日至十二月二十一日

午前八時半始午後一時半終

自一月八日至三月十九日

午前九時始午後二時終

右保育時間の長短に由り適宜に時間割を豫定し置くも必ずしも之に拘泥せず、幼兒心身の状態天氣其他の事項に應じ臨機變更して實施するものとす。

左に時間割豫定表の一例として七月一日より同十日迄の分を掲ぐ

土	金	木	水	火	月
唱歌	談話	唱歌	組舞	唱歌	隨意遊嬉 會集
豆細工	協同遊嬉	粘土細工	協同遊嬉	摺紙	協同遊嬉 隨意遊嬉
隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉	積木 會集
隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉	隨意遊嬉

市川君に 東 生

本誌前號に於て、拙著幼稚園保育法の分明ならぬ所を懇々示指せられたる君の厚志に向つて深く感謝す、此號に於て、僕聊かその辯すべき所を辯じ、以て、君の厚意に酬ひなんかと思惟せし所、雜誌編纂の上より遂に事愈と違うて、次回にするの已むを得ざる事となりぬ、乞ふ諒せられんことを



雜 報

●女子高等師範學校 ▲夏期休暇 本科専修科とも既に本月二日を以て終業式舉行、附屬校園とも来る十一日より、愈夏期休暇となるべし。 ▲戦時講話 毎週土曜日午後、地理、外國歴史擔任教授の戦時講話は、例の如く開催されしが、先月第一土曜日には、特に、石黒男爵の本邦赤十字事業の發達に關する講話ありて、最も深き感動と興味とを與へられたり。 ▲演習會 附屬高等女學校第七回演習會は、さる月十八日、體操場に開催されぬ、参考のため、プログラムを左に

開 會 午前八時

唱歌(みが、すば) 一同合唱

第一期讀 一年生
第二期讀 二年生

●大日本女子教育會 下田氏の主幹たる全會の第

第三	説話	乙三年生
第四	ピアノ獨奏	四年生
第五	合唱 月みれば	甲三年生
第六	對話	四年生
第七	合唱 夢	五年生
第八	英語對話	專攻科一年生
第九	獨唱 このみ山	專攻科二年生
第十	ピアノ獨奏	專攻科二年生
第十一	説話	專攻科三年生
	休憩	凡そ十分間
第十二	合唱 日本海軍	一年生
第十三	説話	二年生
第十四	英語對話	乙三年生
第十五	説話	甲三年生
第十六	ピアノ獨奏	專攻科二年生
第十七	對話	四年生
第十八	對話	五年生
第十九	英語朗讀	專攻科二年生
第二十	合唱 舊友舊時	專攻科一年生
第二十一	説話	專攻科三年生
	唱歌(たのしわれ)	一同合唱
	閉會	正午

六十八
二回講演は前月十九日、帝國教育會内に於て、元
良博士の心理上錯覺と美感との關係、吉田靜致氏
の女子の獨立心の講談ありたり。

●大塚音楽會 東京高等師範學校學生の間に
なる同會は、先月二十五日小石川大塚の同校講堂
にて第二回演奏會を開會せり。一時半頃よりは
續々聴衆の來校するありて、定刻には、さしほに
廣き講堂も内外の紳士淑女學生等にて滿ち渡りぬ
さて、當日のプログラムは左の如し

- 第一 部
- 一、唱歌 聲樂部會員
斥候、戰場の跡
 - 二、ピアノ連奏 〔坂〕野覺
マルサ 小林 庸 吉
 - 三、獨唱 神 保 格
デージー
 - 四、ヴァイオリン獨奏 今堀友市
ホプリー

五、ピアノ連奏

デヴルス　マーチ

〔村山〕 沼次郎

六、唱歌

英國國歌

聲樂部會員

第二部

七、唱

鹿瀨中佐、騎兵の襲撃

聲樂部會員

八、ピアノ獨奏

ウヰリアム、テル

神保格

九、尺八

鹿の遠音

上原 六四郎氏 (來賓)

十、ヴァイオリン及ピアノ

みだれ(華曲)

〔今堀友〕 保格市

十一、ピアノ獨奏

アール キング

スウキフト教授夫人 (來賓)

十二、合奏(ピアノ、オルガン及ヴァイオリン)

メデイテーション

器樂部會員

十三、合唱

君が代

一同

何がさて、一始めてから尙日が淺き故と幹事の某學生が申されたれど、夫にしては見事の出來と申

すの他なく、殊に神保君のピアノは一段の喝采を博したりしか如し、プログラム中、來賓上原氏は都合によりて止め、代はりに他の人の六段曲吹奏あり、來賓、スウキフト教授夫人のピアノ獨奏エルケーニツヒは、有名なるゲーテの詩に、シューベルトの曲を附したるもの、詩の意味十分に顯はれてさすが本場所丈けに違つたものなりと思はせたり序に、日本國歌君が代と、英國々歌、米國々歌を同唱せしは、甚だよかりしも、日本國歌を合唱する時には、黃米の貴婦人までも悉皆起立させながら、彼國の國歌を歌ふ時は、何も言はずに、皆一同腰かけた儘で聞かせ居るなどは、折角來會せる外國人に對して面白からず覺えたり、如柯のものにや

さて、かゝる會は、昔し第一高等學校に在りし由

なるも今は、立ち消えの様なり、此會丈けは是非
將來に發達させたまものなり、寄宿舎生活をして
趣味あらしむる上にも、はた、生徒の嗜好を高尙
ならしむる上より見ても、

序に、職員は餘り關係せざる由にて、何も悉皆學
生の手に成る由、唱歌も、樂曲も、皆此會にて、
選したるものなりといふ、騎兵襲撃の唱歌を左に

騎兵の襲撃

神保格作歌

一、萬馬地を蹴りて 飛ぶが如く

千里雲湧きて 空に漂ふ

敵の矢丸霰と 注がばそそげ

我が太刀はよしや 碎けば碎け

我等が駿馬には日本の男兒乗れり

二、進め、我が男兒、太刀かざして

襲へ、彼の敵を 彼何者ぞ

ゆく手遮ぎる者は 我が蹄かけて

唯一撃の下に 蹴散らし果てむ

日本魂向ふところ 敵地なし

新刊紹介

▲言文、日本唱歌 全四冊 小島政吉校閲
近森出來治作曲

實際に悉く子供にやらして見ないから分らぬが、
材料の排列の至極當を得てること、歌詞が言文一
致に出來て居る爲めに、尋常小學校、幼稚園の唱
歌には最も適當して居ること、且つ、樂曲が、平
易に出來て居て、これ亦、幼稚な生徒の嗜好によ
くわてはまゐることは、蓋し疑ひなからう、著者は
師範學校教諭として、斯道に十分經驗のある人で
ある(定價各冊八錢)(東京神田裏神保町光風館發

行)

▲鹿兒島藩の風教一名健兒の教育。

野島藤太郎君著

著者は現に、鹿兒島縣師範學校長たり、序に曰く
吾邦目下の急務は國民の剛健なる性格を陶冶する
に在り、予是に見る所あり、鹿兒島に於ける武士
教育法を探究して大に國民教育に資せんと欲し、
或は父老に聞き、或は事實を蒐集し、後日の備忘
に供せり、然るに世間魔城風教の實を得て國民教
育に資せんと欲するもの亦少からざるを信じ、之
を世に公にす云々と、蓋し、過去に於て、現時に
於て、幾多の名士を我國に提供したる魔城の教育
の真相は、之に依りて始めて明にするを得べく、
人を教育する任にある者、自ら修練せんとする者
之に因りて得る所多からん(一冊二十五錢郵稅四

錢 下谷車坂町三一、元々堂發行)

▲男女の研究 全一冊

大鳥居奔三 共著
澤田順次郎

著者の一人は中學校、一人は師範學校の教諭で、
其上、坪井正五郎博士、遠藤宮崎縣師範學校長の
序文あり、之丈で既に、此書物が、從來ありふ
れた、造化機論一流の書物でないことが知れるべ
し。評者は、未だ十分精讀せざるが故に、茲には
詳細なる批評と紹介とをなす事を得ざれども、男
と女とを各方面より研究して、遺憾なからしめ
たるが如し、従つて年少き未婚の青年、少女には
讀ませたくなき個所もあり、且つ、少しく望む所
をいは、今少しく實際生活上に關係させて記述
する所ありたらばと思ふ節もなきにあらねど、大
體よりいつて、極めて有益の著述なりといふべし
(定價五十錢 神田裏神保町六、光風館發行)

▲あはれみ

動物虐待防止會の趣旨を世に弘め又會の狀況を報告する爲のものです、讀みよい可愛らしい廉價な(一部金二錢)小雜誌である。同會の目的は已に世人の知らるゝごとく、博愛の心を養ひ人道をおしひるめる爲に動物をいぢめる事を防ぐのにあるので「わはれみの趣意も之で悉して居ます、何卒直接に牛馬其外の畜類を取扱ふ職分の人々は勿論一般の親御達小供衆が此「あはれみ」を讀んで虫けらに至る迄凡て動物をいたはるといふ人間の重き道を自ら履み行く様に又不心得の人には之を讀ませて心を改めさせる様に願ひます」と其第一號に發行の趣意を述べて居られるが、吾人はかゝる良き雜誌が新しく生れ出でし事を喜び其前途を祝すると共に、世人特に直接に子供の教育に當つて居らる

方々に之が熟讀を勧め大人が先づ此會の精神の在る處を辨へて以て小さい人達にも幼より人道を實踐せしめられん事を切望する。神田區南甲賀町八番地 動物虐待防止會發行)

▲中等夜學校睦友會報 第二號 神田區永富町六番地中等夜學校睦友會發行

書問勉學の邊なき日勤の子弟をして夜間、高等普通學の全般を履修せしめんとする中等夜學校の學生の同窓會報なり、校長江原素六君の講話其他會員の論說等あり

▲軍國の少年 神田區小川町一、開發社發行

▲軍國の女子

名前で以て、凡そ中味が想像されましよう、二とも目の覺め相な奇麗な表紙で、奇麗な口繪と、滿洲の地圖が附いて居る。少年少女に日露戰爭の由

來戰時と戦後との心得を知らせるが目的である、
時節柄、愛讀せられるに違ない(定價一冊十二錢)

▲心の花 竹柏會主 佐々木信綱大人の主幹た

る心の花雑誌は、本月其八巻四號を出された。逐
號嶄新の材料に富み、細くに従ひ、自ら清爽を覺

える(一冊十二錢郵税一錢 日本橋區本石町一

竹柏會出版部) ▲女子の友 東洋社より出で居た

る雑誌女子の友は、今回更に交友社(牛込市ケ谷

田町二ノ三〇)より出づる事となりたり、本誌一

五三號社説に革新の辭あり、但し、大方は今迄通

り誌友の寄書の金玉の文字なり、革新の序に口繪

誌友小照も廢して如何と思ふ ▲家庭新聞 熊本市

から發行する本新聞の家庭の讀料として極めて適

當なことは何時か紹介したり、近來は更に、日露

戦争記の附録を添えたり、定價一部三錢 月三回

の發行なり ▲すみれ、可愛らしい文學雜誌で、讀
んで清酒たる文字多し、發行所は甲府市、

會 報

明治三十七年六月十一日午後一時半より女子高
等師範學校附屬幼稚園に於て第三十三常會を開く
當日は以前の常會と趣を異にし特別の演説者なく
會員田中ふみ、野口ゆか氏の幼稚園保育につきて
の實驗談、下田たづ氏の感すべき某良家庭につき
ての談話等あり而して此間會員互に右に付きての
所感及意見を述べ尙隨意談話中茶菓の響應及唱
歌等あり。當日は出席者僅に四十名に過ぎざりし
も互に胸襟を開きて語り合ひ有益に過したり閉會
五時

當日區組合よりの報告順番は日本橋區なりしも

報告の事項なきため見合せたり尙組合に多少の變
 動あり各組合の委員も定りたり左の如し

- 1 日本橋區 委員佐藤むめ、橋本はな
- 2 神田區 全 (未定)
- 3 麹町區 全 野口ゆか、山下つや
- 4 四谷區 全 小貝てい、守瀬淺茅、吉澤
- 5 牛込區 河合ちよ
- 6 芝區 堀 てつ
- 7 本郷區 全 田中ふさ
- 京橋區
- 赤坂區
- 下谷區 全 下田たつ
- 淺草區 和田くら
- 本所區 大山千代
- 深川區

附右の變動は京橋が芝、麻布、赤坂に下谷、淺草、京橋、本所
 深川が本郷に合併したる結果なり

- 小石川區竹早町女子師範學校 小 原 藤 枝
- 京橋區新富町四丁目六 右紹介小谷野千代 西村きしえ

右事務所申込

- 本所區中ノ郷瓦町一東橋小學校附屬幼稚園 久米 たつ
- 右紹介和田くら
- 熊本縣飽託郡大江村七七一 臨山 まさ
- 日本橋區箱崎町三丁目 右紹介中村五六 傍島 たま
- 赤坂區仲ノ町二十 右紹介中村五六
- 女子高等師範學校 佐藤 さた
- 同 右紹介淺岡はま
- 同 土方 ひさ
- 同 山下 ふさ
- 同 渡邊 のぶ
- 同 酒井 たね
- 同 牧あさを
- 同 鈴木 ざん
- 同 田副 つる
- 同 藤 井 豊
- 北豊島郡大泉村大字上土支田六三四加藤彌次右衛門方 右紹介岩田ゆき
- 京橋區木挽町九ノ三二吉田方 大川 なみ
- 赤坂區青山權田原町四一 湯本 ゆき
- 右紹介小谷野千代 中安 親子
- 右紹介武井綱枝

轉 居

東京府女子師範學校	足立	たか
新潟縣高田高等女學校	高山	ふみ
横濱市南太田町一七五五	村田	よね
静岡縣静岡市高等女學校	安野	みち
臺灣基隆築港局官舎	川上	光子
佐賀縣師範學校	野原	つね
札幌區北一條西十二丁目一ノ三號官舎	高島	長江
淺草區向柳原幼稚園	福井	榮
麹町區中六番町四十六	鈴木	たけ
本郷區西片町一〇ホノ十號小林武彦方	永田	かい
新潟市白山浦一ノ五十九森田弘道方	原	さ
東京下谷區中根岸五十四	御園生	よ
小石川區大塚窪町五	吉田	幸
日本橋區箱崎町一ノ一	傍島	た
麹町區一番町三十四	大賀	ふく
廣島縣立廣島女學校	岡部	子
東京麹町區元園町二丁目九	松山	鑑

會費領收 自明治廿七年五月二十九日 至全 年六月二十九日

金額	年月日	姓名
一〇〇	三七、四	山田マス
一四〇	三六、三	吉良ハヤ
一一〇	三七、一	杉本園

三〇	三七、五	山本いさみ
一一〇	三六、七	大江きま
三〇	三七、三	大森くに
一〇〇	三七、六	四川肇
一二〇	三七、四	關谷い
一〇〇	三六、九	遠藤長江
五〇	三七、六	脇山まさ
五〇	三七、四	坂元つや
一〇〇	三七、一	佐々木はる
一〇〇	三七、一	小泉千代
六〇	三七、一	吉田はる
七〇	三七、一	岡田うめ
六〇	三七、八	木村寅
二〇	三七、一	甲斐直枝
二〇	三七、一	原さう
一〇〇	三七、八	野村ぎん
一〇〇	三七、四	北野晴
五〇	三七、三	池邊千東
七〇	三七、六	岸邊福雄
三〇	三七、七	淺岡はま
三〇	三七、六	佐藤さだ
四〇	三七、七	山崎いよ
三〇	三七、五	小西壽美
二〇	三七、五	大山千代

一〇〇	三七、三	—	三七、一二
一〇〇	三七、四	—	三八、一
五〇	三七、二	—	三七、六
一一〇	三六、二	—	三七、一
五〇	三七、七	—	三七、一一
一一〇	三七、一	—	三七、一二
一〇〇	三七、八	—	三八、五
一一〇	三七、七	—	三八、六
六〇	三七、七	—	三七、一二
一〇〇	三七、六	—	
一〇〇	三七、六	—	
一〇〇	三七、六	—	
一〇〇	三七、五	—	
一〇〇	三七、五	—	
一〇〇	三七、五	—	
一〇〇	三七、五	—	
一〇〇	三七、六	—	
一〇〇	三七、六	—	
一〇〇	三七、六	—	
一〇〇	三七、六	—	

山中下枝	山	中	下	枝
青田しう	青	田	し	う
清水寛三郎	清	水	寛	三郎
久米たつ	久	米	た	つ
永井まん	永	井	ま	ん
本多しま	本	多	し	ま
太田とめ	太	田	と	め
益田一枝	益	田	一	枝
藤谷いわ	藤	谷	い	わ
内田たね	内	田	た	ね
三輪もと	三	輪	も	と
高松幾代	高	松	幾	代
鷺藤のぶ	鷺	藤	の	ぶ
井村重代	井	村	重	代
岩田ゆき	岩	田	ゆ	き
中安親子	中	安	親	子
宮地ますほ	宮	地	ま	す
若林みつ	若	林	み	つ
吉田金次郎	吉	田	金	次
日比格	日	比	格	
松浦かめえ	松	浦	か	め
澤村きみえ	澤	村	き	み
平野みよ	平	野	み	よ
楠本勝一	楠	本	勝	一

二〇	三七、五	—	三七、六	田中ふみ
二〇	三七、五	—	三七、六	下田鶴
二〇	三七、五	—	三七、六	雨森鋼
二〇	三七、五	—	三七、六	田邊春
二〇	三七、五	—	三七、六	武井綱枝

本誌第五號に掲載すべかりし會費領收の中編輯の都合に由り省略せし分數名之あり次號に掲載致すべく候。

會費は東京御在住の方には近々集金人差し向け申すべきに付き御渡し下され度く候地方の方に未納の向は至急本會あてにて小爲替を以て御拂込み下され度く候

七月

フレール會幹事

鹿兒島縣師範學校長 野島藤太郎先生著

鹿兒島藩の風教

●一名健兒の教育

全一冊 定價金廿五錢 郵稅四錢

●本書は鹿兒島縣師範學校長野島藤太郎先生が鹿兒島藩に於ける風教の梗概を叙せられたるものなり。島津家が七百年來西方の雄鎮たりし原因を知らんとせらるゝ諸君鹿兒島藩より維新の太祖臣の輩出せる理由を知らんとせらるゝ諸君及び未來の大國民を養成せんとせらるゝ教育者並に父兄諸君は必ず本書を一讀せられんことを望む

家庭日用理科あるべし

全二冊 定價金卅五錢 郵稅金六錢

●本書は現時國民の缺點なり指摘せざるゝ理科的知識の缺乏を補はるべしとて井田先生が該博なる識見を以て著はされたるものにして日常の事物に當つて生ずる疑惑を氷解せんもする少年子女及家政整理の重任に當る良妻淑女の必ず一讀せざるべからざる長篇なり

東京市京橋區銀座四丁目十五番地

發兌元

全 晃山堂書房

元々堂書房

賣捌所 東京京橋區弓町十二番地 松邑三松堂
關西大賣捌 大阪市東區備後町 吉岡實文館

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タルヲシテハモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ヘシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ提出スヘシ
- 第五條 名聞希望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ會員トナスコトアルヘシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達セシメ爲スニテノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎月四月二十一日之至開キ保育ニ關スル演說、談話、保育委員會品物完成成績展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲ行フ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ
 - 一 總會 毎月一月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協賛、演藝等ヲ行フ
 - 一 組合會 會員中特ニ研究事項ヲ研究シテトスル者ヲ以テ組織ス
 - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ發行シ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認ムル事業ヲ行フ
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長一人 會務ヲ總理ス
 - 主幹一人 會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ヲ諮詢ス
 - 第八條 會長ハ各員選舉ヲ組織スルモノトス
 - 第九條 主幹ハ會長ノ補選トス
 - 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二年トス
 - 第十一條 評議員ハ會長ノ補選トス
 - 第十二條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ選キ其ノ職務ヲ掌ルモノトス
 - 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルモノトシ之ヲ變更スルモノトス

大日本割烹學會内石井式割烹教場廣告

女子手藝學科增加

○割烹教授法ニ付キ調査ノ所大キニ其必用ヲ感ジタルニ由テ六月一日ヨリ割烹教場家庭料理日曜授業部へ左ノ學科增加ス

○花結 ひもむすび

○綵花 ざくらわ

○識絹 しんじゆ

以上日曜日午前授業

業割烹全科午後授

業○本科割烹增加手藝ニテ授業一ヶ月謝金壹圓○增加手藝ノミ習學一ヶ月謝金五拾錢日曜午前授業○家庭料理部金曜授業部へ實用西洋料理部(水曜授業)ヲ增加ス○本科及增加兼修ニテ授業料一ヶ月謝金壹圓○增加西洋料理部ノミ習學一ヶ月謝金五拾錢第一第三水曜午後授業○以上ノ家庭料理部實用西洋料理部ノ外ニ

特 日用惣菜料理部 アガヒ 創設教授法研究科トシテ又割烹教員養成科トシテ設置スル所ナラシメ主曜日午後授業ス

女子 夏期講習會

會員募集

乘ル八月二日ヨリ午日開京都市舊藤津女學校(御幸町二條下ノ西側)ニ於テ本會第三回女子作法夏期講習會及第二回女子割烹夏期講習會ヲ開會ス

一 學科 ○日用實用法 ○高等女學校教授課程(作法割烹共) ○簡易婚禮式

一 講師 本邦料理師範八世 森井治兵衛 宮中式臣民式作法及割烹講師 石井泰次郎

○入會希望者ハ七月二十五日迄ニ名簿ニ講習料ヲ添テ本會事務所又ハ京都市御幸町二條下ノ西側藤津二馬氏宛ニテ申込ムベシ

○講習時間及講習料其他詳細規則書アリ入用ノ方ハ郵券封入申越サレタシ

明治三十七年六月

東京市京橋區 錦糸町千一番地

大日本禮節學會 大日本割烹學會

同 所

教 授 界

每 月 一 回 (廿 日) 發 行

特 色

空理空論を避け實際的なる本會の主義を重し
 精確に初等教育の實際問題を研鑽討究したる
 の結果を公表して常に斯道改善の鞭達者とな
 り將た教材の供給者として着實穩健而も斯界
 の燈明台を以て自ら任ずるものなれば内容の
 精選材料の撰擇は勿論殊に此際良好なる戰時
 教材及日露戰爭記を續載し以て讀者が一方に
 教授の資を仰ぐと全時に又一方に時局の大
 局に放眼し得らるゝ便を與へ其他本學期より地
 理歴史諸學科の教授資料を續載供給し又府下
 學校參觀記をも續載して之が批判を試みる等
 實に記事の豊富趣味の清新なる優に斯道諸君
 の好師友にして又本邦唯一の斯界の一大機關
 雜誌なり

● 本誌の内容

● 論說 ● 教授及訓練 ● 教案 ● 實業科 ● 學校及家庭
 ● 體育及音樂 ● 實驗研究 ● 讀者の文苑 ● 學術 ● 雜
 錄 ● 日露戰爭記 ● 戰時教材 ● 彙報

● 本誌の口繪

茨城縣重要物産繪圖
 (標本代用極彩色每野一府縣宛)

● 第一卷第六號 (六月) 發行

● 會 費

● 一册金拾三錢 ● 郵稅一錢五厘 ● 三ヶ月分金四拾貳錢 ● 六ヶ月分金八拾錢 ● 十二ヶ月分金壹圓五十錢 ● 見本は一錢切手拾三枚 ● 會員に特待法あり

後付三

會 成 研 所 行 發

東 京 麴 町 區 飯 田 町 四 目 二 番 地
 (實 業 主 義 事 業 會 社 代 理)

會 員 募 集

會員募集の趣意

衛生の源は家庭にあり家庭を司るものは婦人なり、故に家庭の衛生は婦人の研究すべき所なり、本會は全國婦人の間に衛生の必要を自覺せしめ衛生をして實行的のものたらしめ以て家庭の健康を増進し國家に酬ゆる所あらむとす今其規模を擴張し機關雜誌を改良し大に會員を募て遍ねく幸福を頒たむとす同好の諸姉は入會手續によりて至急御申込われ

明治二十年創立 (本會支會新潟外六ヶ所)

總裁 東伏見宮依仁親王妃周子殿下

會長 侯爵夫人鍋島榮子 副會長濱尾作子

幹事 鳩山春子 羽田三緒子 岡田徳子 高木かう子

山本多穂子 松平芳子 三浦教子 (イロハ) 應評議員松平伯爵夫人外二十餘名 講師賛成員博士學士等百數十名

機關雜誌 婦人衛生雜誌 (毎月二十日一回發行) (無料を以て會員に頒つ)

目錄 講演 朝野名醫大家の所説 ● 寄書 ● 各支會講演 ● 衛生雜誌 ● 質疑應答 ● 看病法 ● 衛生時事 ● 抄録 ● 衛生訓 ● 救急處置 ● 内外實用料理法 ● 中外彙報 ● 會況 ● 會報等

入會手續 入會の節は住所氏名及會員の別 (通常、特別、終身) 等を明記し三ヶ月以上の會費前納小爲替を以て東京市

麹町區飯田橋通受取所振出して申込るべし但會費は通常會員一ヶ月十五錢特別三十錢以上終身一時出金廿五圓とす男子にして本會の趣意を賛成するものは賛成員とす會費前に

同し

集會 本會は毎月集會を開き衛生上の講演を會員及其同伴人に聽講せしむ又毎年總會及懇親會を開き會員相互の親睦を圖る

東京市麹町區飯田町六丁目三番地

私立 大日本婦人衛生會

來出版再れ切賣ち忽版初

長校學範 二第縣知愛
閣校生先吉政島小
論教校學範師山歌和
曲作生先治來出森近

一言致文 日本唱歌
○美木全四冊 正價各金八錢
郵稅各金貳錢

本書科學的研究に基き男女の起源及發達男女生殖上の差異
は諸現象の性質及び生活の差異發生及發育の人類發展の地
と關係するに須要なる事項を明快に解説したる眞に空前の新著なり
されば、世に教育者及び父母たるものは論な男女如何に本書が貢獻
するところの多きは言を要せず。大方の諸彦幸に一讀以て其眞價を諒せよ。



美麗裝釘全一冊
正價 金五十錢
郵稅 金六錢

帝國理科大學 教授 坪井正五郎先生
宮崎縣師範學校校長 遠藤正先生
福岡縣中學校教諭 大鳥居奔三君
修猷館教諭 澤田順次郎君
宮崎縣師範學校教諭 共著

人類界之現象 四版 洋裝全一冊 小包郵稅十錢
天界之現象 四版 洋裝全一冊 小包郵稅十錢
自然物之利用 二版 空中及水中篇 正價金七十錢 郵稅金十錢
一日之化學界 二版 洋裝全一冊 郵稅金八十錢

發行所 東京市本町二丁目三番九號 保町 神保町 表町 區 田 神 市 京 東 所 行 發

大賣所 東京市本町二丁目三番九號 保町 神保町 表町 區 田 神 市 京 東 所 行 發

明治三十四年二月廿八日
第三種郵便物許可



文部省
検定
廣告

唱歌教科書

空前の唱歌良教科書!
檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定済

郵税一冊に就き金四錢

教師用	第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢	
第三卷定價金三十錢	
第四卷定價金三十錢	
生徒用	第一卷定價金十五錢
第二卷定價金十五錢	
第三卷定價金十五錢	
第四卷定價金十五錢	
全四冊	定價金十八錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書となし、非常なる大喝采を博し、僅々數月間に三版發行の盛運に會したる本書は、今回其生徒用教師用共に文部省の檢定を経て、更に其眞價を發揮するの榮を得たり。従來文部省檢定済の歌集は、悉く教師用即ち教師の參考書とし、許可せられたるのみにして、生徒用として眞の教科書たるものなし。檢定を経るも、は實に本書か如何なる科の教授上か最完全なる良書たるべし。

洋琴 金參百圓以上 各種
貳千圓迄

ヴワイオリン 各種

鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種
舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上 小太鼓八圓半以上 シンバル 金四圓以上 其他バス、バット、テナ、リアルト、コルネット、トロンボン等 金貳拾圓以上 百六拾圓迄

鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上
○學校用一組拾參圓

手風琴 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

保險 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨレット 其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

ピアノ、調律修繕

郵券貳錢 御送附目錄進呈